魔法科高校の劣等生　災厄を継ぐ者

アルバロス

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔法が御伽噺の産物でなく現代技術となってから約一世紀経とうとする頃……国立魔法大学付属第一高校、通称『魔法科高校』にある一組の兄妹と共に、特殊な父を持つ少年が入学する。

何の因果かそのときから平穏な学園生活が波乱万丈の日々へと移り変わる……

魔法科高校の優等生のキャラも出演します

ｆａｔｅ要素がありますが、基本はＦＧＯとなります。

ＦＧＯは２部の物語は完結している設定です。

藤丸立香及びサーヴァントは本編に出演しません

（名前の登場はあります）

他に注意点があったらその都度追加します

目次

プロローグ ※ 1
第一話 ※ 3
第二話 ※ 6
第三話 ※ 9
第四話 ※ 13
第五話 ※ 15
第六話 ※ 20
第七話 ※ 24
第八話 ※ 27
第九話 ※ 33
第十話 ※ 37
第十一話 ※ 40
第十二話 ※ 43
九校戦編
第十三話 ※ 47
第十四話 ※ 49
第十五話 ※ 52
第十六話 ※ 55
第十七話 ※ 58
第十八話 ※ 62
第十九話 ※ 66
第二十話 ※ 70
第二十一話 ※ 73

二十二話 76
第二十三話 79
第二十四話 82
第二十五話 91
二十六話 95
二十七話 98
二十八話 101

プロローグ　※

「んじゃ、父さん、母さん。いってくる！」
「おーう。後で学校で会うけどなー」
「終夜、そういうこと言わない。蒼司、いってらっしゃい。お母さんたちは後でいくね」
「はーい」
　花柄の刺繍が施された真新しい制服を身につけた少年『枳殻蒼司』は新しく通う高校へと向かう。
　蒼司が居なくなり、閉じた玄関の扉を優しい目で見つめながら思いに耽っているのは蒼司の父、枳殻終夜だった
「蒼司がもう高校か……って言う日が来るとは、過去の自分は思いもしなかったな」
「珍しく終夜が物思いに耽ってる」
「お姉ちゃん、病院に連れていった方がいいんじゃない？」
「木綿季、七色。二人とも聞こえてるからな」
　終夜の珍しい光景に、同じ部屋にいた終夜の嫁たちが笑ったり茶化したりしていた。その光景を終夜は苦笑しながら立ち上がり、入学式参列のための準備を始める
「そういえば、錬君のところも入学なんだっけ？」
「おう。第三高校の方にな。九校戦で会うことになるだろうな、敵同士で。もちろん、見に行くんだよな？」
「当たり前だよ」
　終夜が準備している中、話題は蒼司と別の高校ではあるが同じく新しく入学する終夜の仲間の一家に変わる
「錬君のところってやっぱりＣＡＤ凄いんだよねー」
「ウチにも天才技術者がいるじゃんか。なぁ、簪」
「私があの人に勝てる訳がない」
「まぁ、あの天災兎に勝てそうなやつは、俺も知らねぇからな。ん、簪。ネクタイお願い」
「自分で締めれるくせに」

「そう言わないでよ……。虹架、準備終わった？」
ネクタイを締めてもらった終夜は同じく準備していた虹架に声をかけ、二人とも準備が出来たのでまだ入学式には早いが時間潰しにドライブへいくため家を出……
「よっ。入学祝いに酒持ってきたから飲もうぜ！」
「帰れバカ。なんで朝に持ってくる。せめて入学式が終わってるであろう昼以降に持ってこい」
ようと思った終夜の前に現れたのは、先程話題に上がった錬と同じく、終夜の仲間である龍宮神矢が酒を大量に持った状態で玄関前に立って終夜を飲みに誘う。無論、即断る終夜だが神矢はしつこく粘る
「いいじゃん、少しぐらい」
「お前の少しは普通の少しじゃねぇんだよ。ったく、んで、何の用だ？ただ酒飲みに来たんじゃねぇだろ」
「流石に空気は読むさ。話は入学式が終わってからだ」
話題が移った途端、二人の雰囲気はうって変わるがそれもすぐに霧散する。その二人を見る虹架の顔に不安の色を覗かせる
「終夜、今のは……蒼司に関係あるの？」
「無いと言えば嘘になる。小規模とはいえ、蒼司の学校生活に関わるからな。けど心配しなくても大丈夫なのはわかっているだろ？蒼司を育てたのは古今東西の英雄だ。そうそう負けやしないさ」
終夜は不安を見せる虹架にいつもするように抱き寄せ、安心させようとするが、その顔は未だ見ぬ敵を睨み付けていた

第一話　※

「さてと、そろそろ学校か……ん？」
　蒼司が高校に着くと、既に到着していた二人の男女が痴話喧嘩をしていた。が、蒼司は理由は気になるが特に関わるようなものでもないと、その二人の横を素通りする

　第一高校入学式当日、校門前で司波達也は、兄の入試結果に納得のいかない司波深雪に詰め寄られ、今まで何度も繰り返した内容で言い争う。その最中、達也は自分達の横を通り過ぎた蒼司から感じたプレッシャーに思わず振り替える
「どうなされたのですか？お兄様」
「先程すれ違った彼から謎の雰囲気を感じた。常人には出せるようなものではない。敵では無いことを祈るが……」
　警戒心を植え付けているたは露知らず、一人のんびり校内を探索していた蒼司は時間が来たと、入学式が行われる講堂へと向かう。講堂へつくと半分ほどの生徒が既に到着していたが、そこでは、あきらかな規則性があった。席の前半分は一科生（ブルーム）で占められ、後ろが二科生（ウィード）で埋まっていた。

「あの……隣は空いてますか？」
「ん？空いてるよ」
　特に自らトラブルを招くことはないと、蒼司は前半分で空いている席に座る。蒼司が座って数分後、女子二人が隣に座りにきた。断る理由もないため、席が空いていることを伝え座るよう促すと、一人は一言言ってから、もう一人は会釈だけして二人とも着席する
「あ、あの！」
「何？」
「え、えっと、お名前を聞いてもいいですか？私は光井ほのかです。そして、こっちが」
「北山雫です」

「俺は枳殻蒼司だ。名字は言いづらいし、名前でいいよ」
「じゃあ私も名前で呼んでください」
「私も雫でいい」
「わかった。っと、そろそろ始まるな」
　隣に座った二人と自己紹介を済ませたところで入学式が始まる。入学式は順当に進むが、新入生答辞の際、ほのかの様子が少々変わった。まるで恋する乙女のように
「……なぁ、雫。ほのかの変わりよう。何があったんだ？」
「主席の司波さんと、私たち一緒の試験場だったんだけど、その時に一目惚れしたみたい」
「ああ、そう」
　ほのかの様子が変わった理由になんとも言えない表情の蒼司。そして入学式も終わり、ＩＤ交付を三人で受けに行く。この学校はＩＤ配布時、同時にクラスも発表される
「俺はＡか……雫とほのかはどうだった？」
「私はＡだよ」
「私もＡでした！」
「なら、これからも一緒か。これからよろしく」
「うん」
「よろしくお願いします！」
　ＩＤ交付も終わり、校舎を出ると、人だかりができて、ちょっとした騒ぎになっていた。人だかりの中心は新入生総代の司波深雪だった
「凄い人気だね」
「うわぁ……」
「蒼司、どうしたの？」
　騒ぎの光景を見ている蒼司の引く反応に不思議そうな雫は質問をすると、顔はそのまま蒼司は質問に答える
「周りの男どもの台詞がな……学園に咲き誇る花とか一緒に学べる栄誉とか流石に気持ち悪いわ」
「それは確かに」

生徒会長に促され、深雪が移動し兄の達也と合流する。その光景を見た他の一科生達は達也が二科生であることに反応し、各々見下す反応を見せる。その光景を見ていた蒼司は隣のほのかの様子が変わったことに気づく
「ほのか、どうしたんだ？」
「……あの人だ。入試のとき、すごく無駄のない綺麗な魔法を使う人がいて、流石魔法科高校だと思ったのに……それがなんで二科生（ウィード）なのよ！」
「ほのか……」
「雫、ここを離れようか。ほのかも」
別の騒ぎになってはいけないと、二人を連れその場を離れる蒼司。少し離れた場所でほのかは落ち着きを取り戻した
「大丈夫？ほのか」
「うん、大丈夫。ごめんね、雫。それに蒼司君も」
「俺も特に気にしてない。それでこのあと二人はどうするんだ？特に予定がないなら気分転換にスイーツの店でもどうだ？お代は俺持ちで」
「それは蒼司君に悪いよ」
「気にしない気にしない」
二人を連れ、知り合いのカフェに寄った蒼司は言葉通りケーキを奢り、三人で軽く談笑をした後二人を近くの駅まで送り届けたあと帰宅したのだった

第二話　※

「えーっと、俺の席は……」
「蒼司、こっちこっち。蒼司は私の前だよ」
「見てくれてたのか、悪いな。おはよう雫、ほのか」
　学校二日目、教室に一人で入った蒼司は自分の席を探そうとするが、先に来ていた雫に前の席が自分のだと教えられたので荷物を置き、二人と挨拶を交わす。そして、二人と話そうとすると、突如教室にいる生徒が一点に注目する。その一点には登校してきた深雪の姿があった

「突然なんだと思ったら…ああ、司波さんが来たのか」
「……あ、司波さん。私の後ろかもしれない」
「えっ!?…そ、そういうことは早くいってよー」
「今気づいたのに、これ以上早いのは無理」
「まぁ、確かにな。けど雫、自分の席解ったときに見なかったのか?」
「うん」
「なら仕方ないな」
「蒼司君まで!?」
　こうやっている間にも深雪は自分の席である雫の後ろまで向かってくる。それにつれて、ほのかの慌てようも大きくなる。
「ほのか、自己紹介のチャンスだよ」
「う、うん。……あ、あの司波さ……はわっ!ぶっ!」
「ブフッ」
　雫に後押しされ、自分の席にいる深雪のところまで自己紹介するために向かうほのかだが、緊張のしすぎで数歩の距離なのに自分の足がもつれ司波さんの前で転けてしまう。それを見た深雪は、ほのかを心配して手をとり、声をかける
「大丈夫ですか?」
「あ、ありがとう、司波さん」
「どういたしまして。……あの、」

「光井です。光井ほのかです！」
「司波深雪です。光井さん、仲良くしてくださいね」
　続けて、雫もほのかのフォローに回るように自己紹介をしにいく
「すいません、この娘おっちょこちょいなもので」
「酷いよ雫！たしかに迷惑はかけたけど！」
「こちらは…？」
「北山雫です。ほのかが司波さんの凄いファンでして」
「ちょっと!?」
「どこかでお会いしましたっけ？」
「試験会場が一緒だったみたいで、そこで一目惚れしたそうですよ」
「やや、やめてよ恥ずかしい！」
　クラス内で始めはほのかへヒソヒソとどんくさいやつと話す声が聞こえるが、今は女子同士の会話に羨ましそうな目を向けながら自分達が一目惚れと言っても引かれるよなと愚痴を溢していく
「蒼司は自己紹介しないの？」
「蒼司さん？」
「あ、俺に飛んでくるんだ……じゃあ自己紹介を。俺は枳殻蒼司です。名字は皆呼びづらいとのことなので、中学から基本名前呼びをしてもらってますんで呼びにくかったら名前でも大丈夫です」
「先ほども名乗りましたが、司波深雪です。よろしくお願いしますね、枳殻くん」
　自己紹介を終えた雫から振られ、蒼司も自己紹介をする。そんな蒼司の背中には、クラスの男子連中の嫉妬と羨望の混ざった視線が刺さり、多少気分が悪くなっていた

『ただいまよりオリエンテーションを開始します。生徒の皆さんは席についてください』
　蒼司の自己紹介が終わってから少し時間がたち、オリエンテーションを始める放送がかかり、全員が席に座っていく。蒼司たちとは離れた席のほのかと一旦別れ、自分の席に着席し担当の先生からの話を聞く。その後、先生の解説付きの授業見学か、又は先生の解説は無いが

自分の興味のある授業の見学を選択することになる。クラス全体の意見として二科生とは違い、先生の解説付きの方が良いと先生についていく方が大多数である。ただ、言い方が二科生を見下すような感じゆえに、深雪の顔は険しく、そのことにほのかは心配する。と、話が終わるやいなや、共に回ろうとする男子に深雪が囲まれることとなる

「ちょっといいですか？司波さん！」
「なんでしょう？」
「司波さんはどちらを回る予定ですか？」
「私は先生について……「奇遇ですね！僕もです！やっぱり一科なら引率してもらうほうですよね！補欠と一緒の工作なんていってられませんよ」
「いえ、そういうわけでは……」
「だったらもう集合場所に急がないといけませんね！」
「そうですね、光井さん、北山さん、それと枳殻君もいきましょうか」
　深雪にどちらにするのか聞いた男子は、自分達と同じだと解った途端、自分のペースで話を進めていく。と、そこにほのかが強引に割り込み、深雪に集合場所に行こうと声をかける。深雪は前の席の雫と蒼司に声をかけ、四人で集合場所へ向かおうとする。蒼司は、断るかどうか一瞬判断に迷うが、変な感情を向けられるよりマシだと誘いに乗り、集合場所へと向かう
「急に割り込んでごめんなさい」
「ううん、助かっちゃった」
「（……気の毒）」
　先程深雪に声をかけた男子たちは、気まずそうに少し距離をとって着いてくる。目的地が同じためそうなるのは必然だが、雫は彼らを見て気の毒だと心の中で溢していた

第三話　※

「いい加減にしてください！深雪さんはお兄さんと一緒に帰ると言っているんです。他人が口を挟むことじゃないでしょう！」
「でも、昼もあまり喋れなかったし何より二科生にはわからない話もあるんだ！」
「そうよ！少し時間を貸していただくだけなんだから！」
「……はぁ、全くこいつらは」
　放課後の校門で言い争っているのは、蒼司のクラスで一グループのリーダー各の森崎駿と名前の知らない女子生徒。言い争っている内容は、深雪が兄と帰るか、森崎たちと帰るかというだけである。
　こうなる原因として時間は昼食まで遡る。食堂にて、達也が始めに知り合った千葉エリカ、西城レオンハルト、そして森崎と言い争っていた柴田美月の三人と食事をしてきたところで深雪が食堂に到着する
「おーい、深雪。こっちよー」
「エリカ！美月！お兄様！（あと一人……はどなたかしら）」
　深雪の姿に気づいたエリカが深雪を呼び、それに気づいた深雪も見知らぬ男子生徒は誰なのだろうと思いながらもその席へ近づいていく。達也たちの座っていた席は六人席であるため席の関係上、深雪の他にあと一人しか座れないため、ほのかと雫は気を利かせて、蒼司と三人で別の席へ移動しようとしたとき、森崎がとんでもないことを言い放った
「おい、君たち。ここの席を譲ってくれないか？二科は一科の補欠だ。授業でも食堂でも一科生が使いたいといえば譲るのが当然だろう？」
　思わぬ言い分に驚き何も言えなくなる蒼司。すると、達也が自ら席を譲り、それにいい気分となった森崎はさらに達也と食べたいという深雪の意見を否定して一科生と二科生のけじめをつけないといけないと言い、周りもその意見に賛同しエリカたちに席を退くよう、怒号を放つ。呆れたエリカたちも席を離れ深雪は森崎たちと食事をともにすることになった

「(司波さん……)」
「ほのか。他の席にいくぞ」
エリカたちと同じく呆れた蒼司は、雫と深雪を心配するほのかを連れ、別の席にて三人で食事をとった

こんなことがあった放課後にまた深雪と一緒に帰りたい森崎たちと美月たちで言い争いが始まったのだ
「こんなのって……」
「ほのか……」
「はぁ、アホらし。雫、カバン持ってて」
「蒼司、何する気?」
「止めてくる。ついでにバカどもに説教だ」
「でも、蒼司。逆上されたら……」
「大丈夫だって。だから二人とも、絶対に手を出すなよ?」
ほのかの様子を見た蒼司はカバンを雫に預け、騒ぎの渦中へ進んでいく。心配する雫に蒼司は軽く大丈夫と声をかけ、そのまま言い争いに加入する
「おいそこのバカども」
「なんだ!……枳殻か。お前からも言ってくれ。司波さんは僕たちと帰るべきだと!」
「だから!」
パチン!
「はいはい。ちょっとストップ!眼鏡かけた子。気持ちはわかるけどちょっと黙っててね。……俺はこの二科生の彼女らじゃなくてお前らにバカっつったんだ」
「なんだと!」
「食堂の一件でもそうだし、今のもそうだが…森崎。お前一体何様だ」
蒼司の暴言が自分達へむかったものだと言われてから全員蒼司の見る目の色を変えるが、気にすることなく森崎に呆れた表情で話を続

ける
「確かに、魔法科高校は実力主義であるし、二科生が一科生に劣っているということも事実だ。だが、それだけで存在が劣っている？ハッ、バカも休み休み言え。人間性で言えば遥かにお前らの方が劣るわ」
「何だとお前！」
「それに、お前ら。実力主義っていうなら、なんで入試で一位を取った司波さんの言うことが素直に聞けないんだ？」
　この蒼司の言葉に森崎たちは全員言葉を詰まらせる。が、蒼司はお構いなしに徹底的に追及していく。その中には二科生であれば、上級生でも席を譲らないといけないもんなぁ等と、答えづらいものも含まれており不用意に答えることもできず全員口を閉ざしていた。そして、森崎たちが怒りに震えながらも黙っていると、蒼司はわざと森崎の逆鱗を踏みにいった
「あ……すまんすまん。名門森崎の人間として、存在が劣っている人物を守っているやつからしたら当たり前のことだったな」
「貴様ぁ!!!!」
　突然の物言い、そして家業を馬鹿にされ激昂した森崎は、ＣＡＤを抜き攻撃魔法を発動させようとするが、ホルスターから拳銃型のＣＡＤが出た途端、蒼司に手ごとＣＡＤを蹴り飛ばされる。何が起こったのかわからず、飛んでいったＣＡＤの方向を見ていた森崎が、状況を飲み込み蒼司の方を向き直し、取り巻きたちも我慢できないとそれぞれＣＡＤを出そうとした瞬間、全員いいようのない恐怖と寒気に襲われる
「司波さんはてめぇらの自尊心を満たす道具じゃねぇし、二科生のやつらもてめぇらの欲求を満たす自慰の道具として学校へ来てるわけじゃねぇんだよ。んなこともわからねぇガキがはな……
　目障りなんだ、失せろ」
　森崎たちが感じたのは蒼司が発した殺気であり、最後におもいっきり森崎の足を踏みつけ脅すような口振りに踏みつけた蒼司の足を振り払った森崎はそのまま取り巻きたちと逃げるように帰っていった

「っとまぁ、こんな感じかな。後適当にやってりゃ大人しくなる……かなぁ。あ、悪い。これでいいよね？」
「えっと……あの、はい」
さっきまでと違い、何事もなかったかのように普段の調子に戻った蒼司の姿に少ししか反応できない美月。そんな蒼司の目には遠くからこちらに向かってくる生徒会長と風紀委員長の姿を捉えていた

第四話　※

「いやぁ、凄かったな。さっきのは」
　第一高校の近くで営まれているカフェ。既に達也、エリカ、美月は来たことのあるこのカフェにいるのは、先程から一緒の達也たちと蒼司たちである。
　ちなみに、あの後騒ぎを聞きつけた生徒会長と風紀委員長が校門まで来たが、達也が主になって蒼司と二人で行き違いによる勘違いであったことにし、その場を簡単に収め、生徒会長と風紀委員長からの小言だけをもらってそのまま帰されたのである
「蒼司が突然あの森……なんとかを怒らせることを言ったときは驚いた」
「森崎な、雫。クラスメイトの名前だけでも覚えてやれ」
　感情とは別に、名前を覚えられていない森崎のフォローをした後、顔を達也の方に向ける
「んで、なにか言いたそうな顔だがなんだ？達也」
「森崎との言い争いで、見事な蹴りを披露したが何かやっているのかと思ってな」
「（……誤魔化したな）一応、李氏八極拳を習ってる」
「にしてもよー。よくＣＡＤを抜いた瞬間に反応出来たよな。あ、俺は西城レオンハルト。レオって呼んでくれ」
「俺は枳殻蒼司。蒼司で構わない。んで、さっきのだが反応できたってより、反応したが正しいな。わざと怒らせたんだし」
　いきなり、疑問からぶつけて自己紹介を後にしたレオに苦笑しつつも、自己紹介をしたあと、レオの質問に回答する蒼司。そんな蒼司も自身から達也へ話の矛先を変更させる
「それなら達也もよくあんな話に持っていこうと考えたな」
「ああ。あのとき来た七草生徒会長たちはどういうトラブルが起こったのかは知らなかったようだからな。既に森崎たちもいなくなっていたから状況操作をするのは簡単だと思ったんだ」
「悪知恵働くし、達也は性格が悪そうだな」

そういった瞬間、深雪の方から謎の圧と寒気を感じ、直感で話題を切り替える蒼司。その後は、授業のことや、別の他愛ない話をして、そのままお開きとなった

「……」

「お兄様、帰宅されてからずっと考え事をされているようですが、やはり……」

「ああ。蒼司のことだ」

深雪と二人で過ごす自宅に帰った達也の脳内は、蒼司のことで占められていた。達也の中で、入学式の校門ですれ違った顔のわからない一生徒は蒼司だと結論付ける

「今は敵ではない。別段俺たちの生活を脅かすようなこともないだろう。だが、注意しなければならないのも事実だ」

情報が少なすぎるためそこまで深く考えることはしない達也だが、蒼司の動向には十分警戒することを決めるのであった

第五話　※

あの騒動の翌日、教室に入った蒼司はクラス中から、敵意の視線を向けられる。が、その雰囲気に気後れすることもなく自分の席で後ろの雫やほのかと、後から登校してきた深雪たちと四人で談笑を楽しくやっていた。そして、深雪と話している最中、蒼司へ視線を向ける男子に向かって煽るような表情をするため、さらに敵意の視線は強まり、それを見ていた雫からは性格が悪いと発言されたのだった。

「司波さん、生徒会室にいっちゃったね」
「うん」
「入学式の日にも生徒会長から声をかけられてたしな。十中八九、生徒会入りの話だろう」
「達也さんも一緒かなぁ……」
「そうだと思うよ……（あれ、達也さん？）」

放課後になり、生徒会室に呼ばれていた深雪と別れ、三人で帰っている蒼司たちの話題は深雪に関してだった（あまり積極的に蒼司は話題に触れていなかったが）そこでほのかの達也の呼び方に引っかかった雫は同じことを思った蒼司と顔を見合わせるが、特に触れることもなく会話を続け、そのまま帰宅していくのだった

そして数日後、第一高校は部活の新入部員勧誘週間に入った。この期間中にはどのような部活なのかを魅せるためにＣＡＤの携行も許可されるが、優秀な一年生を獲得するためＣＡＤを使った魔法絡みのトラブルもまた多いのが実情であった
「噂には聞いてたけど、ウチの学校の新入部員勧誘週間ってホントすごいよねぇ」
「確かにな。新入部員獲得にしては派手なのが多いし」
「司波さんは、クラブに入らず生徒会だけ？」
「ええ、他に手が回りそうにないから。これから会長に聞きにいくのだけれど、期間中だけで、追加予算の見積り、修理の手配、苦情受付

ｅｔｃ．色々あるみたいだから」
「そっか……大変だね」
「というか、修理の手配くらい先生がしてやったらどうなんだ……生徒がやったことではあるから自治権を持つ生徒会がやれってのもわからなくはないが……」
　放課後になり、既に勧誘の動きが活発になっている外の様子を見ながらほのかたちと会話している蒼司はその騒ぎの大きさに辟易しているようだ

「うーん、どこにしようかな……」
「すぐに決める必要はないからゆっくり考えればいいんじゃないか？周りはゆっくり決めさせて貰えなさどぅわ!?」
「はいりませんか!?」
「軽体操部興味ないですか？」
　ゆっくり、資料を持ちながら歩いていた蒼司たち三人だが、密かに出回っている入試上位成績リストに乗っている（というか2位と3位が雫とほのか。蒼司は少し手を抜いて5位である）の三人に詰め寄る上級生が多く、逃げようにも逃げられない状況に陥ってしまう
「だ、ダメ、選ぶとこじゃないよ。逃げよう雫」
「同意だけど無理」
「!?」
　と、三人が揉まれていると、唐突に現れた二人組に雫とほのかが抱えられ、そのまま拐われてしまう。二人を取られたことに周りは悔しがるが、まだ蒼司が残っていたため、蒼司へ殺到するが、全てをかわして、雫とほのかを連れ去った二人組を追いかけていく

「わっ！渡辺風紀委員長がすごい形相でおいかけてくるんですけど！」
　雫とほのかを連れ去った二人組は、一高の卒業生であり、ＯＧに好き勝手されてたまるかと、風紀委員長の渡辺摩利が鬼の形相でその二

人を追いかける。と、突然別ルートで追いかけてきた蒼司もその追跡に参加する。すると、逃走する片割れが、魔法を使い地面へ下降気流を叩きつける。それが追跡する蒼司たちには向かい風となり、逃走する二人には追い風となる。
「えっ！蒼司君まできた!?けど、魔法が」
「んー、邪魔だし斬るか」
　蒼司は暗器のように、袖からカッターナイフを出してそのまま下降気流を切り裂き、一時的に無効化する。その光景に蒼司以外の目が点になる。
「ちょっと、なんなのあの子。とんでもないわね！」
「あちゃー、このままだと振り切れないな」
「あー、考えてみれば追い付いたとしても二人を解放させる手段がねぇな。どうすっかな」
　足止めが簡単に突破され、対応に少し困っている二人と追いかけながら雫たちを救出するための手段を考える蒼司。そのタイミングで摩利が動いた。二人のスケボーの動きを魔法で止める。が、すぐに態勢を立て直され、お返しとして先程魔法を使ったＯＧの相方が摩利の前に段差を作る。そこを乗り越えようと前輪側を上げた摩利を風でこかそうとするが、摩利はうまく態勢を立て直す。だが、その間に距離を離される
「萬谷先輩に風祭先輩まで、どうしてここに!?」
「コイツらを頼む」
「新入部員よ。可愛がってあげて」
「何してっ……て、エアークッションあんのかーい！」
　ＯＧが所属していたバイアスロン部の場所まで来た二人は突然の登場に驚く現役の部長へいきなり雫たちを預け、そのまま去っていく。雫たちが放り投げられ、蒼司は二人を受け止めようとスピードを上げるが、二人の体は空中で止まったためスライディングにてスピードを落とす。
「おい、バイアスロン部。お前たち現役生もグルなのか!?」

「私たちは無関係です！」
　追い付いた摩利が、現役生たちを問い詰めるが、何も知らないと主張したため、邪魔をしたと、軽く挨拶だけして逃げた二人を追いかける。現部長の五十嵐亜実は、何も言えない顔で摩利を見送ったあと、雫たちの方をむいて自己紹介をする
「先輩たちが迷惑をかけてごめんね。あなたたちは新入生よね？私はバイアスロン部の部長の五十嵐亜実です……あっ、三井ほのかに北山雫…さん？」
「私たちのことご存知なんですか？」
　自己紹介をしていないのに名前を言い当てた亜実に不思議そうなほのかに蒼司が事実は正解の予想を教える
「それはな、恐らく入試の結果が出回ってるからだと思うぞ。そうじゃなきゃ、適してなさそうな部活まで雫たちに群がらないからな。ですよね、五十嵐先輩？」
「あー、うん。そ、その通りなんだよねー」
　事実、本来はダメな入試結果が出回っていることを言われて、反応に困った亜実はとりあえず目をそらしてやり過ごし話を別の方へと持っていく
「あの様子だと、入部希望ってわけじゃないだろうけどせっかくだから聞いてくれる？私たちはバイアスロン部。正式名称はＳＳボート・バイアスロン部よ」
「ＳＳボートバイアスロン部？」
　せっかくだからと部の説明をし始めると、ほのかが疑問点を質問してから興味を引けたと攻めた結果、連れ去られたときの風祭と萬谷の二人の魔法に惹かれた雫がほのかに入りたいとほのかが一緒に入ることを条件に入部希望をし、部長と雫の二人の圧に屈したほのかも入部することになった
「二人は入るみたいだけど、枳殻君はどうするのかな？」
「先輩には申し訳ないんですけど、俺は入らないです。入ろうとする部活が既にあるんで。兼部するか片方だけかは決めてないですけど」
「それは残念。って……この騒ぎは？」

「……うげっ！」

蒼司が入部しないことに残念そうな亜実だったが、蒼司たちが来た方面から複数の人が走ってくる音が聞こえたと思ったら、蒼司を勧誘するのを諦めない多数の生徒が追いかけてきており、それに気づいた蒼司は亜実に簡潔に挨拶をしたあと、全速力でその場から離れていく。

雫たちと、部長他、バイアスロン部のメンバーたちはそんな蒼司の姿を可哀想な目で追っていたが、ちょうどバイアスロン部のデモンストレーションを行う時間が近づいたため、その準備に奔走していった

第六話　※

「おはよう、蒼司。昨日はあのあと大丈夫だった？」
「なんとかな。目につかないところで木に登ってやり過ごした。今日帰るときが心配だけど。あのあと雫たちは大丈夫だったのか？」
「うん、バイアスロン部と狩猟部の数人がサイオン酔い？で倒れてバタバタしちゃったけど」
　昨日の騒動のことを雫と話していた蒼司は、いつも通りの日常を過ごす。最後の授業が体育のため、着替えに更衣室へと向かい着替え終えたあと、指示されたグラウンドに向かうと先に一人で軽くストレッチを行う。と、着替え終えた雫たちが蒼司の元に集まった
「蒼司、男子は何やるの？女子は担当の先生が出張でいないらしいから、男子の見学だって」
「男子はレッグボールだぞ。１―Ｂと対戦するってさ。負ける気はさらさらないが」
「蒼司、そこまで言うなら負けたら私たち三人にケーキ奢りね」
「司波さんまで入ってんの!?逆に勝ったらどうするんだよ」
「……女の子に奢らせるの？」
「うぐっ……ケーキを奢らせていただきます」
「うん、よろしい」
「枳殻くん、いいんですか？」
「そうですよ。別に雫の言う通りにしなくても」
「言ってしまったものは仕方がないから気にするな」
　高嶺の花である司波深雪とお近づきになりたい生徒は多く、ただ一人男子で仲良く話している蒼司には、他クラスのＢ組からも敵意を向けられる。そんな中、授業でひときわ存在感を出していたのは悲しくも蒼司だった。蒼司がボールを持つと、仇をとるかの如き猛攻が来るが、ひらりとかわして得点を決め、森崎の一件もあり味方からパスが出されないが、取られたボールを奪い返したりと、結果４得点、６アシストの大活躍を見せた

「はい、蒼司。預かってたタオル」
「ありがとう、雫」
「凄いよ蒼司くん！大活躍だったよ」
「枳殻くん、何かやってたんですか？」
「父さんがサッカー関連が好きで得意だったから、小さい頃から教えてもらってたんだよ。」
　試合終了後、蒼司は雫、ほのか、深雪の三人のもとに戻り、雫に預けていたタオルを受けとり汗を拭う。男子からの嫉妬の視線は相変わらず蒼司の背中を刺しているがもう気にしていない。気にすればただただしんどいだけなのだ
「ほのかー！雫ー！」
「あ、エイミィ！」
「……誰？」
「あ、蒼司は知らないよね。この子は……」
「私は明智英美。日英のクォーターで正式にはアメリア＝英美＝明智＝ゴールディ。二人みたいにエイミィって呼んでね」
「俺は枳殻蒼司だ。名字が昔から呼びづらいと言われてるから蒼司で構わない」
「よろしく、蒼司！」

「……雫？ほのかがあしたのジョーの最終回みたいに真っ白になってるけど何があったんだ？」
「深雪に名前で呼ばれて、名前で呼んでいい許可をもらったらこうなった」
「あー、そういうこと。」
「ほら、ほのか。私たちも行こう」
「司波さんが深雪で私のことは、ほのかって。ほのかって」
「はいはい。ぶつからないよう気を付けてー。あと、蒼司も深雪のこと、名前でいいってさ」
「……深雪は俺の状況がわかって言ってるのかな。」
「早速、名前で呼んでる蒼司も蒼司だと思うけど？」

ほのかのショート具合に苦笑しながら二人の後ろをついていく蒼司。だったが、三人とも一時停止しなければならない事態に直面し、そろりと窓から校門前の様子を伺う
「うっわ。校門前の勧誘、逃がさないってオーラがすっげぇ……」
「あの中をどうやって帰るかだよね……」
「いや、二人より俺の方がしんどいんだからな？まだ入ってないんだから」
「あれっ？三人とも今帰り？」
「あっ、エイミィ」
「どうしたの？」
「見ればわかる。アレ」
三人でどうするか談義していると、ほのかの後ろからエイミィが声をかけるが、気づいていなかったほのかはビクッと体を震わせ、エイミィに気づいた雫が窓から見える光景をエイミィにも説明する
「？……ああ、なるほど。確かに苦労しそうだね。三人とも、隠密系の術式は持ってないの？」
「隠密系？何それ」
「簡単に言えば、意識を逸らしたり姿を隠す魔法だな。俺は得意じゃないなぁ。あいつの方が上だし――…」
「……あいつ？」
「今年、第三高校に入学した幼なじみ。それはともかく、二人はどうなんだ？」
「私は使えないけどほのかは得意。でも魔法を使うのはルール違反」
「いつもなら守らなきゃだけど、今は魔法が飛び交ってるじゃん。大丈夫大丈夫」
玄関をでると、待ち構える上級生の後ろをほのかの魔法で隠れながら歩く四人。ほのかの魔法で蒼司たちの前方に鏡を作り、見ている人物からしたら裏で作業をしている風に見えるため、気づかれることはなかった
「これだけで、結構気づかれないもんなんだね」
「映ってるのが背中と植木だから…」

「反対から見ると植木の奥で作業してるように見えるわけね」
「ばっちりだよ、ほのか」
「あたっ……ほのか、どうしたの？……風紀委員？」
「あ、深雪のお兄さんだ」
　四人の視線の先には、取っ組み合いをしている二人を止めようとする達也の姿が
「あっ！空気弾（エア・ブリット）！」
　取っ組み合いを仲裁する達也の後ろから魔法による攻撃が行われたが、それを達也は回避。その攻撃した者を追いかけようとするも、取っ組み合いをしていた二人に邪魔されて追いかけることはできずにいた
「うわっ、アレをかわすんだ」
「あれはわざとだな」
「うん、今のは偶然じゃない。どうみてもわざとだった」
「私にもそうみえた」
「……あ、彼、二科生なんだ。でもキリッとしててなんかイイ感じ。知り合い？」
「新入生総代の司波さんのお兄さんだよ」
「あの究極美少女の!?かっこいいのも納得だわ。２年生？３年生？」
「私たちと同じだよ」
「あれで同学年？ただ者じゃないね。……だったらやっかみかもよ」
「えっ、何が？」
「あのー、話が盛り上がってるところ悪いんだけど……ほのかさん。魔法解けてる。ほら、アレ」
「「えっ？」」
　盛り上がる三人の後ろを蒼司が指指すので、三人が後ろを向くと、ほのかの魔法が解けたため、姿に気づき勧誘のために襲いかかってくる上級生の姿が
「「ぎゃあああああ」」
「ま、まにあってますーーー!!」
（俺はまだ決まって無いけどね……）

第七話　※

「おおっ、屋上なら学園全体が見渡せるね。それに、何も近くで見る必要はないのよ。遠くからの方がよくわかることだってあるしね。それにクラブのユニを着てればしっこく勧誘されることもないし」
「確かにそうだね」
「はぁ……何故こうなったし」
　昨日、あのまま上級生から逃げ帰った道中にて、エイミィ発案の達也が襲われている証拠を押さえる少女探偵団が始動し、蒼司も半ば無理やり巻き込まれる形で行動を共にしていた。そして、雫たち三人は双眼鏡で観察対象の達也の姿を探していた
「さて、ターゲットはどこにいるのかなっと」
「いたよ。実験棟の並木道」
「あっ、ホントだ」
「これじゃ、ただのストーカーだろ……」
「あっ！……えっ？消えた……今の、キャスト・ジャミング？」
「（キャスト・ジャミング？いや、そもそもアンティナイトは一般人が所持できるようなものではないし……しっかし、少し前から感じる見られている感覚はなんだ？）」
「あっ、逃げた！襲撃者だよ。右の木陰の方！」
　ちょうど達也に魔法が放たれたため、雫がエイミィの言う方向へ、魔法で遠視しようとするが、間に合わず、雫は犯人の見ることは叶わなかった。だが、エイミィはしっかりと顔を確認することができていた
「顔見た？」
「見たよ！バッチリ！あれは男子剣道部のキャプテンだったと思う」
「えっ、ほんと!?」
「写真か何かで確かめないといけないけど多分間違いないよ」
「写真……かぁ」
「確かめるか？」
「できるの!?」

巻き込まれたとは言え、参加している時点で同罪かと、知っていることを教えるため三人を連れ教室の自分の席に向かう。席につけば授業中はロックされている、学内ページへとアクセス。そこから部活の競技成績と各部活の写真が載せられているページへと移ると、三人に変わる

「あのとき逃げてったのコイツだよ！間違いない！」

「三年Ｆ組司甲か…」

「動機はなんだろ……やっぱり嫉妬？」

「それはおかしいと思う。その人Ｆ組だよ」

「でも「同じ二科生なのになんであいつだけ！」ってならない？」

「私たちが最初に見たのは一科生のグループだった」

「こんなこと言いたくないけど、一科生と二科生が手を組む……って考えにくいよね」

「そうだな。一科生と二科生の溝は深いから手を組むのはないと思うぞ。あのときの森崎たちも実際対立したし。はたから見たら俺たちも一緒だが……あ」

「ええと……手を組めないからつまり複数のグループが狙ってるってことかな」

「複数……」

ほのかの推測に蒼司が答えるが、最後の言葉で、雫とほのかが気を落とし、ため息をつく。とっさにエイミィが話題を変えようとするが、何故か傷口を広げる方に持っていき、ほのかがさらに沈んでしまった。と、そのほの口から飛び出した

「襲撃現場の写真をとるのはどうかな！」

「「写真!?」」

「……そこまですると本格的にストーカーなんじゃ……」

「いや、今までのも十分ストーカーの範疇なんだが……」

頭を抱えつつツッコむ蒼司を他所に、どんどん話をすすめるほのか。雫曰くこうなったほのかは止められないらしく、エイミィも不本意ながら手伝うこととなったが、時間も時間のため、雫たちは帰ろうとするが、蒼司は用事を理由に三人と別れる

「さてと、まずは……」
雫たちと別れた蒼司は鞄から紙を取り出すと、何かをさらさらっと書いた後折り畳み、そのまま足を生徒会室に向ける。生徒会室から少し離れた廊下で達也と出会うと声をかける
「ラッキー。ちょうどよかったよ、達也。ハイこれ」
「なんだこれは」
「達也が家に帰ってからのお楽しみ。用件はそれだけだ。んじゃ俺は帰るわ」
突然、紙を渡してそのまま去っていく蒼司に疑問を持つ達也は、帰宅後見ろと言われた紙をその場で開く。そこにはこう書かれていた
『達也が風紀委員として活動中に妨害しようとする輩をほのかたちが証拠として写真を残そうとしている。おれには止められんからまぁ耐えてくれ。あと、ほのかたちにそんな趣味はないだろうからそこは安心してくれ』
達也自身が感じていた視線の主がわかり、このあとはどうするかと考えつつも、用件を済ませるため生徒会室へと足を進める

第八話　※

「あれから音沙汰なしかぁ……せっかく頑張って写真撮ったのにね」
「やっぱ匿名じゃ信用なかったのかなぁ」
「それもある」
　数日前、達也が襲われたときの写真をゲットしたほのかたちは、学園内のシステムを使って生徒会に通報したのだが、証拠にするには難しく、それ以上の進展もなかった。深雪も、気をつけるよう伝えようとするも、伝えることは出来ておらず、少し気まずい雰囲気が互いの間にできてしまっていた

「あっ」
「えっ、何？」
「あそこ、ホラ。剣道部の主将だよ」
「えっ、あの写真の？……あれ？今日は剣道部休みじゃないって聞いたけど……」
「そうなの!?…あやしい。なんかピンときた！」
「ちょっとつけてみようか？」
「そうだね、気になるし」
「止めとけ。危ないぞ」
「私も異論はないよ」
（ちょっと、俺の意見は無視ですかお三方!?）
　そんなことを言い合っている四人の前を通った剣道部主将。だが剣道部は今日、休みではないのに一人帰宅は怪しいと睨んだエイミィたちは尾行することを決める。
　そこに蒼司のまともな意見は反映されることはなかった
「……なんでさ！」

「どこまで行くんだろうね。そろそろ学校の監視システムの外にでるよ」

「そうだね…。家がこっちの方角なのかな？」
「いや、朝はキャビネットで登校してるのを見たから違うはずなんだけどね」
「なんか……ここまでくるとちょっと不安かも」
「実は私も」
「エイミィも!?」
「完全に不安がないわけじゃないけど、でも」
「「私たちなら……」」
（いや、これどー考えても監視外に誘い出されてるよな……ただこのことを伝えるとやっぱり怪しい！ってやる気を起こさせるだけだし……仕方ない。万が一のときには……殺るか）
　必死に尾行を続ける雫たちは、少し不安を抱えていたが、私たちなら大丈夫だという謎の自信を全員がもっていた。その一歩後ろを歩いている蒼司は、明らかに誘い出していることがわかってはいるが、エイミィたちのやる気をこれ以上上げないため、何も告げずに周囲の警戒をしながら三人についていく

「（……味方の呼び出し方法、他にないのか。バラしてるもんだぞ）」
「あっ！」
「わかんないけど、とにかく追うよ！」
　大通りを外れ、路地に入ったのち、立ち止まり携帯端末らしきものを取り出したとき、蒼司は予想を確信にかえ、どこからか来るであろう援軍に対して注意を払う。そして、連絡が終わり走り出した司甲をほのかたちは追いかける。が、行き着いた先には司甲は居らず、背後はらフルフェイスのヘルメットを被ったバイクの男四人に囲まれる

「なっ、なんですかあなたたちは！」
「まぁ、露骨な誘い出しだよなー。うんうん」
「って、蒼司気がついてたの!?」
「どう考えてもこんなところにくる時点で誘い出しだろ。それに伝えてもどうせエイミィはやはり怪しいと踏んで、やる気だすと予想した

から伝えなかったんだよ。反論できるか？」
「うっ……そう言われると反論できない」
「四人……か。三人とも。一応ＣＡＤのスイッチをつけて待機」
「蒼司…何するの」
「ん？全員ぶっ倒すだけだけど」
　誘い出しだったと蒼司が一人納得していると、エイミィが驚いた顔を向けるがさも当然かのようにエイミィに説明とそれについて反論があるなら受け付けるというが、エイミィはできるはずもなく、不満げな顔を蒼司に向けるだけだった。その顔を受ける蒼司は三人にＣＡＤが使用できる状態で待機するように伝え三人前に出る。怯える雫の質問に男たちを倒すと簡単に言ってのける蒼司は姿を消す
「「えっ!?」」
「がっ！」
「んなっ！きさガフッ」
「このっ！」
「……偽无二打（にのうちいらず）」
「ゴブホッ」
「死ねっ！」
「お前がな。フッ」
「カッ……」
　ドササッ
「う、うっそぉ……」
「……李書文老師（せんせい）の拳には程遠いなっ！」
「ガハッ」

　蒼司は一瞬で一人の男の足元へ移動しており、その男を下から顎への掌打で倒すと続けて雫たちから見て右の男から、喉への蹴りで倒し、続けて、その体を踏みつけつつ三人目の男に（威力も速さもなにもかも老李書文・槍李書文の両名に劣り、なおかつ手加減している）偽无二打（にのうちいらず）を放ち沈める。最後の男は、左手による顎への一撃で脳震盪を起こし、崩れる体への蹴りにて壁にぶつけ、同じく撃沈。最後に、掌

手をくらいながらも意識があった最初の男にトドメを刺す。男たちはなにも出来ずに全滅した
「みんな、大丈夫か？」
「う、うん。大丈夫、ありがとう、蒼司」
「皆……大丈夫!?」
「え、深雪!?なんでこんなところに」
「私は生徒会の先輩が発注を間違えて、買えていないものを買いに来たところ、みんなの姿が見えたから……どうしてこんなことに？」
「さぁな。剣道部主将の司甲が怪しいと追っかけてたらこいつらに襲われたんだよ」
「この人たちはいずれ監視システムに発見されるけど警察に通報したほうがいいかな？」
「私は少し、大事にしたくない事情があるのだけれど。被害者のみんなが訴えたいなら止めはしないわ」
「ううん、必要ない。監視カメラにもとられてないし、蒼司のおかげでなにもなかったから」
　雫たちが胸騒ぎを覚え、ついてきていた深雪と話している最中、蒼司は敵の体をあさっており、ひそかに指に付けていたアンティナイトを回収する。雫たちには見えてないが、深雪だけはそれをはっきりと見えていた
「そう。それじゃは私はここで別れるけどみんな気をつけてね（蒼司くんは何を……あれは、アンティナイト！この男たちはもしやブランシュの関係者？）」
「心配せずとも大丈夫！全員倒した強い蒼司くんがいますから……あれ？蒼司くん、どうしたの？」
「いや、何でも（手袋の中にアンティナイトの指輪か……回収しておくとして、敵がなんなのか父さんに聞いてみるか）それじゃあ司波さんは先に行っちゃったけど、帰ろうか」
「「うん！」」

（術式選択『サイオンシールド』『音波遮断』）
「これでよし…と」
　蒼司たちが襲われた現場から少し離れたところで、魔法を起動した深雪は電話をかける。聞かれないようにした状態での電話の先は兄の達也の体術の師匠である忍の九重八雲だった
　ｐｒｐｒｐｒｐｒ
『はい』
「もしもし、司波深雪です。八雲先生ですか？」
『深雪くんが電話をくれるなんて珍しいね。どうしたんだい？』
「いきなりこのようなことを申し上げるのは不躾かと存じますが、先生にご助力いただきたい件がございまして」
『いいよ、僕にできることなら』
「ありがとうございます。実は先ほど学校の近くでクラスメイトが暴漢に襲われまして」
『一高の近くでかい？それはまた大胆な』
「そのものたちはアンティナイトを所持していました。恐らくそのアンティナイトはすでにその暴漢を倒した友人の手にありますが」
『へぇ、ただのごろつきではないのか。それで、そのけしからん輩は今どこに？』
「そのアンティナイト回収した友人が倒した状態で放置しています」
『つまり、僕が警察や仲間より先にその暴漢の身柄を確保すればいいのかな？』
「先生は何もかもお見通しなのですね。それともうひとつお願いが…」
『その回収した友人がどのような人物か、かい？』
「！…はい。その通りです」
『わかった。その友人の名前を教えてくれるかい？』
「枳殻蒼司。という名前です」
『わかった。そちらも調べておこう』
「ありがとうございます。それでは、失礼します」

電話が終わると、先ほどまでの深刻な表情はなく、いつも通りの司波深雪がそこにいた

第九話　※

『全校生徒の皆さん！』
「うっるせぇ！」
　ガガ……
『先ほどは失礼しました。改めて、全校生徒の皆さん！僕たちは学内の差別撤廃を目指す有志同盟です！』
　謎の暴漢に襲われた日、蒼司は終夜から、自分たちを襲ってきたのは反魔法政治結社ブランシュの関係者ということ。また、ブランシュ内部がどのようなものかを教えて貰っていた。内容が内容なので、蒼司は雫たちに知らせることはしなかった
　そして、襲われた日から数日が経過したこの日も、また新たな問題が発生することとなった
（ブランシュ……もっと直接的な手段を取ってきたか）
「どこの馬鹿だ、この放送は！抗議してやる！」
「差別ってなんだよ！」
（はぁ…差別してる方は自覚がないとはこのことか……）
　蒼司のクラス1―Aでは、森崎の取り巻きなどの、プライドの高い連中が、スピーカーに向かって怒りを吐きまくっていた。そんな中、端末を見た深雪は立ち上がり、教室を出ていってしまう。その後この放送の騒動は、全校集会での生徒会長と有志同盟の討論を行うことで終結したのだった
　そして次の日、蒼司は雫たちと昨日決まった討論会のことについて話し合っていた
「ねぇ、深雪。深雪も討論会にいくの？」
「そうね。あまり気は乗らないけど……」
「気が乗らない？……どうしてなの？」
「だって興味が持てないもの。主義主張の為なら何をやってもいいと考えてる人たちなんて。それは蒼司くんも同じようだけど」
「そうなの？蒼司」
「興味が持てないのは一緒だな。考えは違うけど」

「蒼司くんはどんなお考えですか？」
討論会についての話題で蒼司に話が渡ると、蒼司の口からでたのは、有志同盟たちは恐らく明確な目標やこうしたいというものがないただ正統性があると思っているだけの面倒な輩だとバッサリ切り捨てた。その後、時間を見た深雪が生徒会へいったことを皮切りに、それぞれ自分のクラブ活動に参加するために別れていった

「こんばんは、達也くん。深雪くん」
深夜の九重寺。達也は自分の師である九重八雲に司甲について知っていることを聞きに来ていた。
「師匠。早速ですが、第一高校二年の司甲という生徒について何か知っていらっしゃいませんか？」
「風間大佐経由で藤林のお嬢さんに頼んだ方が早いんじゃないのかい？」
「叔母がいい顔をしませんので」
「なるほど。君たちも大変だね。では僕の知っていることを話そうか。司甲は旧姓、鴨野甲といい、彼の家は陰陽師の流れを汲む一族、賀茂氏の傍系にあたる。目は一種の先祖帰りをしていて霊子に敏感だ。ただ重要なのはそちらではなく、母親の再婚相手の連れ子である兄、一（はじめ）だ。甲は彼の傀儡として第一高校に入学している。そのその司一の正体こそ、裏も表も取り仕切るブランシュの日本支部リーダーだ」
「!!」
「僕が知っているのはこのくらいだ」
「ありがとうございます、師匠」
達也の礼にも軽く答える九重八雲だが、次の言葉を発する直前、雰囲気が少し変わる
「いいよいいよ……それと深雪くん」

「は、はい！」
「君に頼まれていた彼の件は終わっているけど、このまま聞くかい？」
「彼？」
「蒼司くんのことです。お兄様にも話したあの暴漢たちを倒してアンティナイトを回収したのは蒼司くんでしたから」
「その枳殻蒼司くんだが……彼の父親、枳殻終夜はかなりの大物であり、さらに謎も多い」
　大物…という言葉に引っ掛かりを覚える達也。彼も大企業ＦＬＴにて、重要な立場の人間だがそんな名前、聞いたことがないからだ。そんな二人を置いて九重八雲は続ける
「二人とも、Ｒ＆Ｄ社は知っているね？」
「ええ。ここ十数年で武装一体型ＣＡＤにおいて世界トップシェアに上り詰めた会社で、とてもやり手の社長にトーラスシルバーにも及ぶと言われ、Ｒ＆Ｄ社がトップシェアをとることが出来た最大の理由たる天才技術者Ｍｓ．ラビットがいるとか」
「確か会社の正式名称はＲａｂｂｉｔｓ＆Ｄｉｖａｓだった筈です」
「そう。そこの社長が彼の父親だ。ビジネスネームは紺野零斗。本名と乖離しているせいもあって彼が社長であるのはあまり知られてないみたいだ。会社としては真っ白。後ろめたいこともないし、黒い繋がりもない」
「会社として……ですか」
　達也は師匠からの情報の一部分に引っ掛かりを覚える
　達也を昔から知っている九重は達也もそこが引っ掛かるとわかっていたのでニヤニヤとした顔をするだけにとどまっていた
「そう、会社としては真っ白だよ。だけど社長である枳殻終夜含め数人の幹部の過去の経歴を調べると……会社が興る数年前以前の記録が一切ないんだ。しかも、消された後もない。まるで、突如彼らが現れたと言わんばかりにね」
「情報がない？」
「うん。過去の交友関係も不明。会社を興すにあたっての資金の出所やその他もろもろについても不明だ」

達也は師匠からもたらされた情報に終夜や蒼司たちが一体何者なのか深い考えに入るが、師匠からのある一言で突如現実に戻される
「そしてこれ以上は僕も調べきれない。始めに調査した時点で気づかれていたらしくてね。先日警告を受けたんだ」
「九重先生がですか!?」
「うん。接触してきたのは羽衣錬という人物でね。恐ろしかったよ。あれは人でないナニカだ。逆らう気は微塵も起こらなかった。達也くんも調べる気なら気を付けるたいい」
師匠の実力をよく知る達也からすれば信じられない事実だが、師匠の表情からそれが冗談でないことを悟り敵になるかもしれない終夜たちへの警戒を上げる。
「そうそう、それと最後に一つ。君たちが九校戦に出るとき第三高校にＭｓ．ラビットの息子が出るそうだ。しかもその子の父親はさっきいった羽衣錬らしく、魔法の技術は十師族以上、ＣＡＤに関してもトップクラスの腕前を持つと聞く。気を付けたまえ」
最後の情報に達也と深雪は感謝しながら九重寺を後にした

第十話　※

討論会当日、蒼司は討論会に参加しないわ雫とほのかの二人と別れて一人、人目につかない植木の上で身を隠していた
「(……ここがブランシュが襲撃を開始するポイントの一つだって聞いたけど、父さんはどうやって知ったんだよ。っと、早速おでましか)」
少しその場で息を潜めていると、襲撃犯が数名突入準備を始めたので、その場にいた襲撃犯を全員気絶させ拘束する
「アサルトライフルにハンドガン……襲うにしても随分な装備だな。まぁ、貰ってくか。殺害は流石にできないからハンドガンメインだな」
襲撃犯の所持していた銃火器やマガジンを所持できる分だけ全て装備し始めると、学園内から爆発音が響き渡る
「……さて…と。ならいきますか」

蒼司が襲撃犯から装備を奪っているのとほぼ同時刻、ほのかと雫は部活に参加していて、ちょうど練習が始まるところであった。ほのかは討論会の様子が気になっていたが、雫は深雪や蒼司の影響かとくに興味を示していなかった。
「はいはーい。今日は演習林が使える貴重な日だからガッツリ練習するわよー!」
「「はーい」」
部長の五十嵐が全員に発破をかけ、練習を始めようとしたそのとき、突如爆発音が響く
「なんの音!?」
「何あれ!実技棟から煙が上がってる!?」
「みんな落ち着く!今、端末で情報を調べるから待機」
「「はいっ!」」

バイアスロン部の部員たちは突然の爆発音にパニックになる。が部長は冷静に、部員を待機させ、情報を確認する。そして、高校が襲われている事実を知り、逆に自分が動揺してしまう
「お、おおお落ち着いて聞いてね。当校は今、武装テロリストに襲われているわ！」
「……マジですか部長!?」
「こんなときに冗談を言うわけないでしょう！護身用のために、一時的に部活用ＣＡＤの使用が許可されています。あくまで身を守るためだからね！」
　このとき、突如全員の背後から襲撃犯の一人がナイフを持って襲いかかる。皆が悲鳴を上げるなか、テロリストはほのかに狙いを定めて走る……と、一歩踏み出したとたん、銃声が響きナイフを落とした男は銃声が鳴った方を向くが、続けて銃声がなり、肩と足を撃たれ倒れこむ
「えっ！一体何が……」
「ああもう。敵が多いっての！アサルト持つんじゃなかった！」
「蒼司くん!?」
　男が倒れたあと、草むらから出てきたのはハンドガンをリロードさせながら歩く蒼司だった。その姿に驚く全員を横目に蒼司は男からハンドガンのマガジンを探しだすとそのまま奪い取り、意識を奪う。いつもと違う雰囲気の蒼司に何も言えなくなる雫とほのか。その二人の反応は当然だと蒼司は五十嵐に周囲の敵は一応先程の男で最後だろうから警戒しながら安全な場所まで移動するようにと伝え、その場を離れようとする。その蒼司の背中から雫は声をかけた
「蒼司。その、怪我しないでね」
「あいよ」
　雫の言葉に軽く手を上げ返事を返すとそのまま去っていく

「北山、三井。ふたりは襲われなかったか？」
「あ、森崎くん。…ナイフを持った敵に襲われかけたけど、蒼司くんが

倒して被害はないよ」
　二人が移動した先で待機していると、避難しそこなった人を見つけて誘導するために移動しかけた森崎に話しかけられた。そのとき、講堂での一騒動を解決した、服部副会長と渡辺通風紀委員長のことを少し興奮しながら話したので、少し引き気味のほのかと、ジト目の雫に気づいた森崎はそのまは、任務遂行のため走っていった
「森崎くんにもまともな部分があるんだね。ちょっと意外。……いつもああだったら良いのにね」
「同感だけど多分無理」
　二人して森崎に対して辛辣である

第十一話　※

「こっちは乱戦状態だな……」
　講堂内での騒動が即鎮圧され、達也と深雪は摩利の声に送り出され、最初に轟音が鳴った実技棟付近へと到着していた。二人ともここに来るまでにも幾人か敵兵を見ていたが、既に何者かによって気絶あるいは銃撃による行動不能状態で転がされていた。
　だが、実技棟付近では一高生徒とテロリストの両方がやったりやられたりの混戦状況である
「達也！…何の騒ぎだ？こりゃ」
「テロリストが学内に侵入した」
「物騒だな、おい」
　レオも混戦状況のなか戦っていた一人だったが、何があったのかわからないまま戦っていたので達也に聞くと、達也はレオの性格を知っているのか、詳細を全て省いた簡潔な説明をし、レオもそれで納得した

「レオ、ホウキ！……っと、援軍が到着してたか」
　ちょうどそのとき、事務室方向からＣＡＤを持ったエリカが姿を見せた。初めは走っていたのだが、達也の姿をみると、走っているその足を緩めて近づいてきた
「これ、達也くん？それとも深雪？」
「深雪だ。俺ではこうも手際よくは不可能だ」
「私よ。この程度の雑魚にお兄様の手を煩わせるわけにはいかないわ」
　持ってきたレオのＣＡＤを投げて渡し、レオから投げるな！との抗議を無視して、足元に転がっている侵入者の姿を目に写しながらエリカは達也に聞いた。その質問の返答は達也と、既に達也の元へ戻っていた深雪が同時に答えた
「がっ！」
「なんだ、コイツは！ぐほっ」

「なんだ？」
「あれって、もしかして蒼司くん？」
　四人がこれからのことを話そうとする時に、一高生徒と戦っているテロリストが次々に倒れていく。倒しているのは、先程到着した蒼司。ハンドガンにて肩や足を撃ち抜き、またナイフで斬り、刺し一人一人処理していく
「あいつ、強いんだな。しかも拳銃までとか」
「いや、そういうアンタは何様よ。これだからバカは」
「なんだと!?」
「でも確かに強いわね、しかも速い。何かをかじってるわね」
　四人がそうこうしている内にほぼ全員を仕留め終えた蒼司が戦闘途中に見かけた四人の元にむかった
「みんな居たんだな」
「蒼司お前、あの人数を一人で倒しちまうとかすげぇな。って、なんだよ、その顔」
「いや、人を銃で撃ったりしてたら普通はあいつらのような反応なはずなんだがな」
　そう言う蒼司の視線の先には蒼司から目を逸らす者が多く、あまりいい顔ではないのが伺える。が、レオの口から出た肯定の言葉に笑いが堪えられずそのまま笑い始めた蒼司だった
「なんだよ。いきなり」
「いや、そんな反応が帰ってくると思ってなかったからな」
「蒼司、お前はここまでに何をしてたんだ」
「俺は今日の部活が討論会のこともあって自主練になってな。暇だから散歩してたらたまたまやつらの侵入ポイントの場所にいたらしく、出会ったからぶっ飛ばした。んで、一番デカい音が鳴った実技棟に向かう途中にテロリストに襲われかけてた雫とほのかを助けて今に至るというわけだ」
「雫とほのかが襲われた!?」
「『襲われかけた』だ！しかも、二人だけじゃなく他の部員もいたよ。敵も一人だったからＫＯして終わったし。で、これからどうするんだ

？」
「彼らの狙いは図書館よ」
蒼司たち五人が今までと、これからのことを話しているとき、突如五人に状況がもたらされる
「小野先生？」
声の主の方へ向くと、いつもの装いとは違い、踵の低い靴にパンツスーツ、ジャケットにその下は光沢あるセーターと行動性重視の服装を身に纏う一高カウンセラー小野遥の姿があった
「向こうの主力はすでに館内に侵入しています。壬生さんも既にそっちにいるわ」
「そうですか、ならいってきます」
「ちょっと蒼司くん!?」
「早速かよ!?」
敵の情報を知るやいなや即突撃していった蒼司に驚くエリカとレオ。だが、達也は遥を正面から見据える
「後程ご説明をいただいてもよろしいですか？」
「却下します、といいたいところだけど、そうはいかないでしょうね。そのかわり、一つお願いしてもいいかしら？」
「なんでしょう？」
「カウンセラー、小野遥としてお願いします。壬生さんに機会をあげて欲しいの。彼女がこうなったのは私の力が足りなかったのもあるから」
「甘いですね。……いくぞ、深雪」
「はい」
「お、おい。達也」
「余計な情けで怪我をするのは自分だけじゃない」
走り出した達也の背中は、これ以上は時間が惜しいと、そう語っているようにみえたのだった

第十二話　※

「おいおい、マジかよ」
　達也たちが図書館前に着くと、既に七割八割ほどの敵が倒されている状況。その原因たる蒼司もまだ他の一高生たちを庇いながら戦っていた
「達也、要るとは思わないが俺はここに残る」
「わかった、先にいくぞ。レオ」
「おうよ！」
　達也たち一向は、自分から残ると言ったレオを置いて、三人が図書館内部へと侵入した

「ふぅ。ここもこれで終わりか」
　達也たちが図書館内部に入ってからある程度時間がたったとき、図書館前の敵は全て鎮圧されていた
「うーん。そうそう強いやつはいないか」
「蒼司、無事……そうだな」
「ああ、レオか。そういや、達也たちはどうした？」
「ああ、三人なら中にいったぜ」
「なら向かうか。困っている……可能性は無いとは言い切れないからな！」
「間が空きすぎだろ。わかるけどよ」

　と、二人が図書館に入ると、入り口からみて少しした先にある階段にて、三人とエリカが女子生徒を一人抱えていた。
　蒼司が声をかけようとすると、エリカの口から驚くべき言葉が飛び出した
「三人ともだいじ「達也くんって……ゲイ？」は？」

「あ、蒼司くん。外はどうなりましたか？」
　何事も無かったかのように話してくる深雪に驚きつつも図書館前の現状を伝える
「既に全員捕縛してあるよ。んで、達也。さっきの話は本当か？俺に近づいたのは体目当てか!?」
「そんなわけあるか!!」
「信じられるか！どうせ仲良くなってから家で何かしらヤるつもりだったんだろ！エロ同人みたいに、エロ同人みたいに！」
　このやりとりをみたエリカは大爆笑しながら蒼司によくやったと言わんばかりに肩を叩いていた。深雪も少し肩を震わせて笑っている。レオも似たようなものだ

「まぁ、この件は持ち越しということで」
「持ち越さなくていい！全く……」
「ほら、さっさと戻るぞ。トロトロすんなよ、達也」
「誰のせいだ！」
　達也が壬生紗耶香を抱えるのを確認して、蒼司たちは保健室へとむかう

　その後保健室では、意識が戻った紗耶香に対して尋問が行われていた。一高にテロリストを招き入れた司甲も風紀委員の実力者二名に捕らえられてはいるが話せる状態ではないため、唯一の情報源であるため、生徒会長、風紀委員長、部活連会頭の三人も揃っていた。が、蒼司は紗耶香の口から語られることに興味ないのか話は全く聞いていなかった
（父さんのことだ……どうせ暇だからって、あの人に頼んで探ってもらってブランシュ潰してるとこだろうな。ブランシュの面々は御愁傷様）
「……はどうする？」

「んぁ？」
「……蒼司まさか、今までの話聞いていなかったとかいうんじゃ」
「うん、全く」
「枳殻。今、ブランシュの元へ襲撃する者を決めているが、お前は残れ」
「理由をお聞きしても？」
「今回のテロリスト襲撃に対して、敵兵を一番撃破したのはお前だ。そのことは、戦闘を見た生徒は理解しているはずだ。そんなお前がいたら生徒は少しでも安心出来るだろう」
「この装備で安心できるとは思いませんがね。ですがわかりました。学園に残り警戒を続けておきます。それでは。達也、気をつけ……ブフッ」
「なぜそこで笑う!?」
「悪い。図書館でのやりとりを不意に思い出した」

蒼司は達也たちと保健室で別れ、生徒会長の真由美の指示を形式上受け、校内を探索。残党がいないかを確認していた。と、同時に人目にある程度はつくが、それほど多くない場所で、自宅へと電話をかけていた

『はい、もしもし』
「あ、木綿季母さん？」
『蒼司、どうしたの？』
「父さんはいる？」
『終夜ならさっき帰って来て、お風呂入ってるよ。何か用だった？』
「ううん、特に。あ、晩ごはんなに？」
『今日は鮭のホイル焼きだよー』
「わかったー」
（……さっき帰ってきた。ってことは達也たちが行ったときには、既に終わってそうだな）
「残党もいないし、さっさと帰るかー」

蒼司の予想通り、達也たちがブランシュのアジトに着いたときには、リーダーである司一を筆頭に全員が捕縛された状態で発見された。アンティナイトを付けていたであろう場所にアンティナイトがない状態のため、達也は終夜たちがやったと考えており、アンティナイトを集めるその意味が計りかねず頭を抱えることになるのだった

九校戦編

第十三話　※

「……結果はよかったけど、嬉しくない」

一学期最後の試験。この試験では九高戦（部活で言う総体と新人戦が同時にある大きな大会）に関わるため、皆のやる気も高く、蒼司の近くでも九高戦が大好きな雫が激しく燃えて、周り（ほのか除く）を驚かせたのも記憶に新しい頃、蒼司たちは無事に試験を終え、結果発表の日を迎えた

蒼司は色々と高得点を出してはいたのだが、総合順位では深雪、ほのか、雫に次ぐ四位。本人はとても複雑な表情であった

「しかも、深雪からすんごい目線が……」

「魔法理論で達也さんの次だけど、深雪が三位だったから、もし逆だったら深雪が並んでたわけだからね」

「はぁ……」

その日の放課後、蒼司は十文字会頭に呼ばれ、部活連本部に顔を出していた。そして、未だに治らない蒼司の呼び方に頭を抱える十文字だった

「十文字ぶ……会頭」

「お前の部長と会頭の使い分けはどうにかならんのか」

「すいません。それで、会頭。今回呼ばれた件は九高戦の種目決めのためでしょうか？なぜ一人なのかはわかりませんが」

「ああ、わかっているのなら話が早い。何故一人かについてだが、一年男子の主力はお前だ。ゆえにお前の希望を聞いておこうと思ってな」

「それでは、クラウドボールとバトルボードでお願いします」

「わかった。七草にそう伝えておこう。だがお前なら、モノリスでも十分活躍できると思うんだが？」

「男子には嫌われていまして。チームプレーは難しいかと」

「そうか……今日はレッグボールだったか？」

「はい」
「こっちでもそうだが、レッグボールの方での活躍もよく聞いている。これからも精進しろ」
「はい！それでは、失礼します！」

（……あの人を前にすると、どーしてもファラオとかヴラドおじさんと会うときみたいに緊張するな。あの二人の方が圧倒的に緊張度は上だけども）
「さーて、部活を頑張りますかー！」
　次の日、達也から九高戦のエンジニアに深雪を味方に付けた生徒会メンバーから指名され、準備会議に出るようになったことを聞いて大爆笑し、締め上げられるのだった

「ほー、やっぱり九高戦にでるのか！種目は？」
「主力になりそうだからと一番に決めさせて貰えたから、バトルボードとクラウドボールでって言った」
「まぁ、妥当だな。……でもなんでモノリスは選ばなかった？」
「男子連中に嫌われてな。チームプレーは難しそうだから」
　十文字と同じことを聞いてくる父親に、自分に向いてるのはやっぱモノリスだよなーと考えつつも他愛ない話をそのまま続けてその日は終わりを告げるのだった

第十四話　※

「おはよう、達也。俺、遅い方か？」
「いや、まだ半分程だ。だが、雫やほのかたちは来ているぞ」
「りょーかい。達也はバスの中で待たないのか？」
「俺は外で構わない。まだそれほど暑くもないしな」
　九校戦の会場へ出発する日、ある程度早めに来た蒼司は外で搭乗確認をしていた達也と軽く話をしたあと、バスに乗り込んだ。見渡すと、深雪、ほのか、雫の三人の姿が見え、雫が空いている窓側の席を指してこっちと言ったので、そこに座った
「おはよう、三人とも早いな」
「おはよう、蒼司。……？眠そうだけどどうしたの？」
「夜遅くまで家で父さんと特訓してたから眠い」
「お父さんとですか。そういえば、蒼司くんのお父さんはどんな人なんですか？」
「普段は母さんに甘くて、甘え下手な良い父さんだよ。戦闘になった途端、人が変わるけど」
　生徒会長の真由美が家の用で遅れるが、全員で待つということで、バスの中でたわいない話をしあった四人。ようやく真由美が到着し、一時間弱遅れてバスが出発した

「……服部先輩からかわれてる、面白。ただ……」
「……」
「（いやこれどーすんのよ……）」
　関わりのある服部がからかわれている姿を見て、内心笑い転げる蒼司だが、顔にはださない。なぜなら自分の席の反対の席にいる威圧感をだす深雪のせいであった。自分たちは涼しいところにいながらも、達也は外に居続けたことへの思いからムスっとしていた深雪だが、雫が達也の行動を誉めたことで、その威圧感は消え、照れ隠しで反応した深雪にほのかは見えないところでガッツポーズをしたのだった

深雪の険悪な雰囲気が収まると、主に一年、それに混じり幾人かの二、三年生が深雪の周りに群がった。走行中のバスの中ということもあり、見かねた摩利が深雪たちを自分の後ろの席に強制的に移動させ、その三人の後ろを十文字と蒼司の二人で睨みを利かせることで、誰も深雪に近づけず、バス内は落ち着きを取り戻した。そんなとき、窓際にて外の風景を眺めていた花音が突然叫んだ

「危ない！」

その声に釣られ、ほぼ全員が窓の外、対向車線を見る。その先には一台のオフロード車が走っていたのだが突然、スピンし壁に激突。そして何故か反対車線、つまり蒼司たちの車線へと入ってきたのだ。バスは急ブレーキをかけたため直撃を避けたが、車自体は未だ炎を上げながらバスへと突っ込んでくる

「吹っ飛べ！」

「消えろ！」

「止まって！」

バスの中でパニックが起こるなかパニックを起こさなかった生徒が無秩序に車に対して魔法を放とうとしてしまう。だが、全ての魔法が相克を起こし、魔法が発動出来ず事故回避が妨げられ、事態は悪化の一途を辿ってしまう

「バカ、止めろ！魔法をキャンセルするんだ！」

このことに気づいた摩利がこれを止めようとするが、その判断が出来る状況の生徒はいなかった

「十文字！」

摩利は次に、この場の全ての魔法を圧倒できる十文字を呼んだ。呼ばれた本人も魔法発動の態勢に入ってはいたが、魔法式が無秩序に重ね掛けされた空間は魔法師の天敵、キャストジャミングの影響下と同じのため、十文字は車の衝突は防げるが消化は不可能とハッキリ摩利に伝えた

「私が火を……蒼司くん!?」

「まて枳た……おい!?」

深雪が自分が火を消すと立ちあがったとき、十文字の隣に座っていた蒼司は突然窓から飛び降りると、真っ直ぐ炎上しながら突っ込んでくる車に向かって足を進める

『事象・照準固定　其は既にその輝きが消え去った』

蒼司は、父から遺伝した魔眼を発動させる。すると、車に掛けられていた魔法式、また周りのサイオンの嵐が突如消えた。だがまだ車は止まっておらず、十文字が魔法で防ごうとするが、動きが速かったのはやはり蒼司だった

『事象・照準再固定　眼に映るは結末を経た汝なり』

蒼司が言いきると、車の動きも止まり事故になることはなかった。けれども車内の意識は既に車にはなく、全て車の前に立つ蒼司の背中に向かっていた。だが、蒼司が何をしたのかは誰もわからないでいた

「蒼司くん。あなた、一体……」

真由美の口から溢れた問いに答えるものはバスの中に一人もいなかった

第十五話　※

「では蒼司くん、あなたがあのとき何をしたのか、聞かせてもらえる？無理にとはいわないけれど」
　あの事故のあとは特に何事もなくホテルに到着した一行。ホテルにて夜に行われる懇親会までは自由時間だが、蒼司は真由美に呼ばれ、ある一室で生徒会等の主な面々に囲まれている
「別に構いませんが」
「なら質問だ。あのとき、お前はどうやってあの車の消火、停止及びあのサイオンの嵐を消した」
「答えは、これです」
　単刀直入に切り込んできた十文字からの質問に蒼司は自分の目を指差したあと目を閉じ、魔眼を発動する。
「もしかして……それは魔眼？」
「はい。父も持つ魔眼であの事故を止めました」
「枳殻。その魔眼の効力はなんなんだ」
「効力に関しては無理やり終わらせる……分かりやすく言えば電源ぶち切りですね」
　蒼司の身も蓋もない例えに一瞬呆れる一同。そんな中、摩利からも問いが蒼司に投げられる
「無理矢理終わらせる……だが、お前はおそらくだが二回、魔眼を発動させていなかったか？お前の言葉通りなら一回で済むはずだが」
「その問いの答えに関しては簡単ですよ。対象が違うからです」
「対象が違う？」
「はい。開始又は継続と事後。この二つに分けれます」
　蒼司の返答に摩利だけでなく他にも頭を捻るものもいた。が、理解出来たであろう、生徒会の市原鈴音が解説した
「あっているかはわかりませんが、先程の事故で言えば、花音さんたちが発動しようとし、相克を起こした魔法は状態でいうなら発動中に当たります。説明からすると、一つ目はそれを自らキャンセルしたようにする、といったところでしょう。二つ目は、車が炎上したままバス

の方へ転がってくるのは枳殻くんが魔眼を発動した時点では既に起こっていた事象です。これから起こる又は継続しているものを対象とした一つ目は使えないので、二つ目を使った。そんなところでしょうか？」
「そ、その通りです。市原先輩」
「さっすが、鈴ちゃん！」
　完璧な説明に思わず顔が軽くひきつる蒼司と、誉める真由美。だが、腕を組み話を聞いていた十文字はさらに蒼司に質問する
「枳殻、これからその力を使うことは「ありませんよ。あれは緊急事態だったからしたことであって、普段は発動しないように言われてます。もちろん、九校戦でも使う気はさらさらありません」……そうか、わかった。七草、まだ何かあるか？」
「ううん、無いわよ。ありがとう、蒼司くん。もう北山さんたちのところへいって構わないわよ」
　十文字からの再度の問いに全て聞くことなく蒼司は返答する。その後、真由美から聞くことはもうないと言われるが、その後に言われたことに引っ掛かりを覚える
「わかりました。……ですが、なんで雫たちの元にいくと思ったんです？」
「だって……蒼司くん、よく北山さんたちといるのを見るから北山さんたちしかお友達いないと思ったから？」
「失敬な！てかなんで疑問系!?」
「はぁ、真由美の悪い癖だ。気にせずいけ」
「わかりました、それでは失礼します」
　真由美のからかいに反応した蒼司は、摩利のフォローを聞き、部屋から退室した。そのあとは、真由美の言うとおり、雫たちの元へ向かったのだが……

「蒼司くんの力、とんでもないわね」
「全くだ。その気になれば魔法師が魔法を発動できないままあいつに

倒されることになる。しかもあいつは魔法が使える状態で」
「だが無意味にその力を振るう男ではないのは俺が保証しよう」
「十文字が言うと、説得力が段違いだな」
蒼司のいなくなった部屋では、蒼司のもつ魔眼の強さに頭を抱えている真由美たちの姿があったのだった

第十六話　※

「はぁ、暇」
「こんな中、暇って言えるのは蒼司くらいだと思う」
　ホテルの大ホールで行われている懇親会の最中、深雪や雫といるなか、あくびをしながら面倒くさそうな雰囲気を蒼司は出していた。懇親会中、深雪の近くにいるため、深雪に見惚れながらも、近くにいるあの男はどういう奴なんだ等の様々な視線をいつも以上に受けるため雫寄りの立ち位置で行動していたのだ
「ん？誰か近づいてくるな……」
　そういう蒼司の視線の先には、第三高校の制服を身に付けた女子が三名いた。その中の一人が深雪へと話しかける
「さぞかし名家のご出身とお見受けするわ。私は第三高校一年、一色愛梨。そして、同じく十七夜栞と四十九院沓子よ」
「第一高校一年、司波深雪です」
「司波……？（そういう家ってあったかしら）」
　一瞬、考える素振りを見せた一色だが、次の瞬間、顔を変え煽ってきた
「あら一般の方・・・・でしたか。名のあるお方かと思ってお声かけしましたの。勘違いでお騒がせしてごめんなさい。試合、頑張って下さいね」
　この言葉にムカッとしたほのかの意思を代弁するように代わりに煽り返す蒼司だった
「ほのか、大丈夫。こういう自分の方が上ですからって言う奴の方があっさり負けるから」
「へぇ……そういうあなたは随分と自信があるようですわね」
「ああ。一般人より強いあなたと力比べが出来ないのは残念ですがね」
　二人の険悪な雰囲気を止めたのは、三人の後ろから来た一人の第三高校の男子だった
「抑えて一色さん。こいつは、こういうのに慣れてるから最終的には

負けるよ」
「なんじゃ、羽衣。こやつのこと知っておるのか？」
「うん、よく知ってるよ。付き合いは長いから」
「見たところ、随分とおとなしくしてるじゃねぇか、カイ」
「そういう君は自重を覚えたらどうだい、ソウ？四月にあった例の事件のこと、神兄さんから聞いたけど随分と暴れたって聞いたよ。」
「自重しろ？やだね。んで…お前は今回何に出るんだ？」
「アイスピラーズブレイクとモノリスコードだけど。そっちは？」
「こっちはクラウドボールとバトルボードだ」
「へぇ、てことは今回は対決がお預けか。楽しみにしてたんだけどなー」
　後ろから愛梨に話しかけたのは、蒼司の友人である羽衣界斗である。出会って早々から互いに皮肉を言い合うのだが、互いの出場する種目が判明し、直接戦う競技がないことで二人とも残念そうな雰囲気を隠さずにいた
『ご静粛に。これより、来賓挨拶に移ります』
「ほー、さらに面倒な時間になったもんだ」
　来賓挨拶のアナウンスがなった途端、興味無いのを隠さず気だるげにステージの方を向く蒼司と界斗。その様子を見て、深雪たちと愛梨たちは一旦顔を見合わせてから二人と同じようにステージへと顔を向けるのだった
『続きまして、かつて世界最強とされ、第一線を退いた後も九校戦をご支援下さっております、九島烈閣下よりお言葉を頂戴します』
「……女の人？」
「九島閣下のご挨拶じゃなかったのか？」
「……気づいてるやつはごく一部か」
　壇上にあがったのが、九島烈でなく女性であったことに多くの生徒が困惑するなか、蒼司はこの場で起こっていることに気づいてる生徒を軽く見渡して確認していた。
　そして、女性がマイク前から横に移動すると、既に女性の後ろにいた九島烈本人が登場する。全く気づいていなかった大半の生徒が驚

きの声をあげる
『まずは悪ふざけに付き合わせたことを謝罪する。今のは魔法というよりは手品の類だが、このタネに気づいた者は見たところ七～八名だけ。その中で、即座に戦闘へ移行する態勢をしていたのがそこにいる二名だった。』
　そういうと、視線を蒼司と界斗のいる場所へと向けると、会場全体からも同じく視線を受ける
『諸君、私が先程用いた魔法は低ランクの物だが、それでも君たちは私を認識できなかった。明日からの九校戦はまさに魔法の使い方を競う場なのだ。諸君らの工夫を楽しみにしている』
「条件反射でとっちまうのはどうにかしないとな」
「ですね」
　九島烈の話が終わると、パーティーもお開きとなり界斗は愛梨たちと三校側へともどっていった。蒼司も、雫たちと会場から出て、何をするか話しながら歩いていたが、エイミィが雫たち三人をホテル地下の温泉に誘ったため、そこで別れ一人ホテル内をぶらぶらとあてもなく歩いていた。が、特に何もなかったため、部屋に戻り家に電話をしたあと、何をすることもなくそのままベッドへとダイブし、そのまま眠りこけたのであった

第十七話　※

九校戦初日、蒼司はスピードシューティングの予選会場に達也たちと一緒に観戦しにきていた
早速、真由美が登場すると男女問わず会場が盛り上がった
「凄い人気だな、会長」
「会長さんの同人誌を作ってるファンもいるみたいですよ」
「どんなファンだよ、それ」
「始まるぞ」
競技の開始のブザーが鳴り、クレーが射出されると、有効エリア内に入った瞬間遠距離から正確に撃ち抜く真由美。その姿と魔法に観客席から歓声があがる
「流石、遠隔魔法のスペシャリスト。妨害もない予選ではパーフェクトは楽勝か」
「ああ。驚くべきはその精度だ。知覚系魔法を併用し、情報処理しながらもあの精度だ」
「流石十師族だな。……っと、これ以降に驚くような選手はいなさそうだから少し席を外すわ」
「どうしたんだ？」
「トイレだ。ついでに、一人で立ちながら観戦してるあいつのところにな」
そういうと、蒼司はそのまま達也たちと離れ、真由美以降の選手を界斗と共に観戦していた。互いに口数は少なくなっていたのだが

スピードシューティングの予選が終了し、バトルボードの予選会場に移動した蒼司たち
「そういやよ、蒼司は新人戦バトルボードにでるけどどんな戦法でいくんだ？」
「確かに。ほのかは達也さんが作戦を立ててくれたけど……」
「それに、練習のときも私の練習に付き合ってくれることが多くて、自

分の練習をしてるところを見てないんですけど……」
「大丈夫、策は既にある。内容は当日をお楽しみにってな」
　第三レースに摩利が登場すると、各校の熱狂的な女子生徒ファンが歓声をあげ盛り上がりを見せる。その光景に、エリカたちは引き気味の反応をみせる
「随分と熱狂的なファンが多いな」
　達也がその光景を冷静に言葉に表す。そしてレースは摩利が一位で勝利した。その後、バトルボードの予選も終わり、一時昼休憩に入った

「父さん、少しいい？」
「おう、どうした？」
「友達が会ってみたいっていうから」
　蒼司は昼休憩の際、先に一人だけ現地入りしていた父である終夜に、友達と会わせたいと伝えに来た。終夜は二つ返事で了承し、雫たちが待つレストランへと向かった

「どうも、皆初めまして。蒼司の父親の枳殻終夜です。いつも蒼司がお世話になってます。あ、一応名刺渡しておこうか。はい」
「あ、ありがとうございます……ってえ!?Ｒ＆Ｄ社代表取締役社長!?」
「Ｒ＆Ｄって言ったら武装一体型ＣＡＤの世界トップシェアの超大企業だぞ!?」
「……蒼司、言ってなかったのか？」
「聞かれなかったから」
「そりゃ仕方ないな」
「それで済む話かぁ!!」
　終夜が超大企業Ｒ＆Ｄ社社長だと言うことが判明したが、教えてない理由が聞かれなかったからという蒼司とそれで納得する終夜の二人に無礼関係なくツッコミを入れるレオとエリカだった

「ねぇ、準々決勝からは紅白対戦型だよね、会長のクレーは何色？」
「赤だよ」
　昼から始まったスピードシューティング決勝トーナメント。真由美が出る第二試合に達也たちも来ていたが、幹比古は人混みに酔い、気分が悪くなりダウン。別のところで休んでいる
「会長は予選と同じ戦い方か」
「うん、だけど相手の戦法の方が効率が良くて一般的。会長の方が珍しいよ」
「流石、雫。よく知ってるな」
「フフ、もちろん。毎年来てるんだもん」
「……（ねえねえ、あの二人良い雰囲気じゃない？）」
「（雫も何かと蒼司くんの隣にいることが多いですから。ここに来るときもバスの席で蒼司君を隣に座らせてましたし。それにあのときのこともあると思いますし）」
「（あのとき？）」
「エリカにほのか。どうかしたか？」
「ううん、何も!?」
「……まぁ、いいか」
「（エリカさん、その件はまた後で）」
　会長の戦いを観戦している最中、いい雰囲気の蒼司と雫の姿を見て、面白そうだとエリカがほのかと二人についてコソコソと話していたが、感づかれた蒼司に話しかけられた途端、慌てて取り繕う二人を見て怪しむ蒼司。だが会場の方に向き直したためホッとする二人。そしてこの話はこの後ひそかに続行されたそうである
「流石『魔弾の射手』これが実践だったら恐ろしいな」
「どういうことだ？」
「会長のコレは全方位死角なし。作るのは弾丸でなく銃口、いや銃座の方がいいのか？まぁいいや。だから障害物なんぞ意味はなく殺し合いになれば、どこにいようと視角魔法の範囲であれば問答無用で殺

られるぞ」
「そんなんありかよ……」
「そうだ。一人だけでも勝利の鍵となる切り札。それが日本最強の魔法師集団。十師族だ」
スピードシューティングは、真由美が全試合パーフェクトを出して、圧倒的大差で優勝をもぎ取った

第十八話※

九校戦二日目、蒼司はクラウドボールではどうせ高校レベルでは収まらない真由美が優勝すると予想し、本部テントにて爆睡。雫やほのかが起こそうとするも微動だにせず、結局二日目はテント内で爆睡していただけであり、真由美からかなりキツイ視線を送られていた

だが、九校戦三日目に事件が起こる。バトルボード準決勝にて、摩利がカーブに突っ込んできた七校の選手と共にフェンスに激突。全治一週間の怪我を負い、バトルボード、そしてもう一つ出場するミラージバットを棄権することとなってしまった。その際に第三者からと思われる魔法が使用された可能性が浮上。蒼司は達也と共に古式魔法使いである幹比古と霊子光に対して鋭敏な感受性を持つ美月を呼び、事件のことを探っていた。

そして、自分たちが出場する新人戦が始まる四日目。トップバッターはスピードシューティングに出場する雫だ

「雫、調子はどうだ？」

「大丈夫、万全だよ」

「ＣＡＤのコンディションはどうだ、雫」

「万全、自分のより快適」

「それじゃあ、俺は観客席に戻るよ。雫、頑張れ！」

「うん、頑張る！」

雫が先に控え室から出たあと、蒼司も深雪たちの待つ席へと戻って競技が始まるのを待つ

「あらぁ～蒼司くん。控え室でなにしていたのかな？」

「ただ頑張れと言ってきただけだ。やましいことなんてするか。達也が証人だ。後で聞いてもいいぞ」

「ブー……つまんない」

「ほら、雫の番が始まるぞ」

開始のブザーが鳴り、クレーが射出されると、雫はそれを魔法にて、豪快に粉砕する

「おお。達也の考えた魔法って聞いたが凄いな、これは」

「豪快にいくわねー」
「これってもしかして、有効エリア全体を魔法の設定領域にしているんですか？」
「そうですよ。領域内の固形物に振動波を与える魔法でクレーを砕いているんです」
「ほー、会長が点での攻撃なら雫は面での攻撃か」
　この予選、雫はパーフェクト叩き出し、さらに達也の開発した能動空中機雷（アクティブ・エアーマイン）はインデックスへ登録されることとなる。が、開発者の名前に達也は雫の名前を出すように依頼した。雫は当然、達也に達也の名前で登録するように言うが、達也はいい返答をせず、雫も食い下がるが真由美によって話は打ち切られた

「雫が見ておきたい選手が三校の彼女か」
「うん、そのうち当たるかもしれないから」
　雫の予選出場が終わると、雫の要望により次グループの十七夜栞の観戦に来ていた
「一つ目のクレーの破壊から、その破片が連鎖的に他のクレーを破壊していく……とんでもない空間把握能力と演算能力だな」
「ああ、この個人特有の力を突き詰めるやり方、恐らく金沢魔法理学研究所での訓練を受けているな」
「よく知ってるな」
「少し伝手があってな」
　栞の予選終了後、達也の作戦のためＣＡＤ調整に向かう雫と達也と栞が出会い、雫と栞の両名は火花を散らした

　そして準決勝。雫の予想通り栞と対戦することとなる
　雫は予選とは違い、準々決勝は収束魔法による自分のクレー同士での破壊とその反動による相手クレーの軌道のズレで勝ち抜いたが、栞は一度だけ見たこの魔法に対応し、軌道が逸れても連鎖を続ける高度な戦いを展開していた。三校側も栞が押しているのを見て勝てると盛り上がっているが、界斗は一人雫のＣＡＤを調整した達也の罠に気

付き、第三高校一年の柱と言える一条の元に向かっていた
「一条、吉祥寺。確実に十七夜さんは負ける」
「なんでた、羽衣」
「まさか！、北山選手のＣＡＤは……」
「間違いなく汎用型だ。照準付き汎用型ＣＡＤ。去年ドイツで発表されたもの。母さん以外に実用化できた奴がいるとは思わず、伝えなかった。すまない」
　界斗は現状わかっていることと、負ける原因にもなったことを伝えなかったことを謝罪するが、吉祥寺も自分もそう納得したからと界斗を責めることはしなかった
「いや、僕もその可能性を除外するべきじゃなかった。しかも、特化型と誤認するほどの魔法発動速度は選手の魔法力がなければ成り立たない作戦だ。まさか一高はこんな隠し玉を持っていたのか！」
「……ん？まてジョージ。羽衣、さっきお前の母親が実用化できたって言わなかったか？」
「言ったよ。けどそれはあとでだ。十七夜さんにそろそろ限界が来るはずだ」
　丁度そのとき、試合中の栞が連鎖を外す。だが、栞はとっさに雫の破片を利用し連鎖を繋げる。が、その後もいくつか連鎖を外してしまう栞。その理由も栞は理解し、負けないため、連鎖を繋げようとするが密かに眠っていた心の中にあるトラウマが最後の連鎖を外すきっかけとなり、敗北。勝利した雫はそのまま勝ち進み優勝を掴んだ

　三校作戦会議室。優勝を狙える筈だった栞がトラウマから本調子が出ず四位敗退。一高の上位独占という結果に重い空気が漂っていた
「ここまでの結果だが、予想以上に一高が得点を伸ばしている……」
「さらにスピードシューティングの女子上位独占は予想もしなかった」
「優勝確実な十七夜が四位で敗退してしまったのが痛いな」

「さっきの試合で僕と将輝、一つの結論に行き着いた。それは羽衣くんのもつ事実もあってだけど」
「一高の勝利はまぐれじゃない。ＣＡＤの性能を２～３世代引き上げる化け物のような技術者がいる。今後もその技術者が担当する試合での苦戦は免れないだろう」
「将輝にそこまで言わせる相手なのかよ……」
「けど、羽衣がもつ事実ってなんだよ」
　将輝が言い放った言葉に動揺が隠せない他のメンバーだったが、一人が将輝の言葉にある疑問点を呟くと、全員がその視線を界斗の方へと向けた。こうなることがわかっていた界斗は驚くこともなく淡々と話し出した
「一高の北山さんが使用したあのＣＡＤ。あれは照準機能をつけた汎用型だ。去年の夏、ドイツのデュッセンドルフで発表された新技術だけど、当時は実用に耐えるレベルじゃなかった。それに今日あのＣＡＤを見るまで、実用レベルに仕上げた人物が母さん以外にいる情報を持たなかったから考えもしなかった」
「あのとき聞いたときもそうだけど羽衣くん。あの新技術を実用化させた君の母親は何者なんだ？」
「まぁ別にトーラスシルバーレベルでの情報遮断はしてないしいいか……母さんはＲ＆Ｄ社ＣＡＤ部門代表技術者。通称Ｍｓ．ラビット」
　衝撃の事実に会議室内は驚きの声で満ちたが、一条がその空気を戻し、今後の対策について話し合いを進めていく

第十九話　※

「さてと……圧勝するかエンターテイメントか。判断に困るな」
　クラウドボール男子が行われる会場の控え室にいる蒼司は一人、手元でラケットを回しながら一人ぽけーっと時間が来るのを待っていた。そこに応援として真由美と摩利の二人が姿を見せた
「蒼司くん。お姉さんが応援に来たわよ！」
「あ、そっすか」
「素っ気ない！素っ気ないわよ！」
「はぁ、全く。蒼司くん、優勝はできるかな？」
「出来る出来ないじゃなく、優勝しか見えてませんが？」
「ほう、言うじゃないか」
「それでは、時間なので……」
「…ッ！」
　応援しに来たという真由美を軽くあしらった蒼司は、摩利に優勝しか見えてないと告げたあと試合のため部屋を出ようとする。その際に一変した雰囲気に摩利はゾッとした寒気に襲われた。

「……」
「どうしたんじゃ？羽衣。そんなに険しい顔をして」
「ちょっとね（相手を威圧するにしても会場の雰囲気まで呑み込むつもりか、ソウのやつ）」
　愛理たちと一緒に観戦していた界斗は会場の誰よりも先に蒼司の雰囲気に気づいたため、一人険しい表情を浮かべていた。沓子がどうしたのかと聞くが明確な返答は得られなかった。が、愛梨や栞を含めた三人とも蒼司の姿が見えた瞬間、界斗が浮かべた表情の理由を察することができた。そして、蒼司の対戦相手も蒼司の雰囲気に呑まれ一点も取れず大敗を喫するのだった
「おっし、こっちも優勝目指して頑張りますか」

「その格好でいうことではないだろう」
　クラウドボールに続いてバトルボードの予選に出場する蒼司は着替えてはいるがベンチに寝そべりアプリゲーム。クラウドボールの時と同じくどうみても今から試合のある選手の姿ではなく、担当エンジニアではないが、観客席にいる深雪たちに変わって応援にきた達也は突っ込んだ
「しかし、あの三種類の魔法だけで本当に勝てるのか？」
「おう。といっても戦法自体は誰でもできるぞ。内容は見た方が早い。そら、達也も観客席にいったいった」
　達也を部屋から追い出し、先程とはうって変わって、頭を抱える蒼司。追い出したのは、約十分前ということで、一人になりたかったというのもあるが、ある気配を察知したからでもある
（父さん……見に行くとは言ったけど、後から英霊の皆が来るとか聞いてねぇよ）
「まぁ、いいや。勝てばいいんだし。……それじゃあいきますか」

「出てきましたよ！蒼司くん！」
「あいつ、戦術は当日のお楽しみっていってたけどよ。どんなのを出してくるんだろうな」
「あっ、達也くん」
「お兄様、蒼司くんがどういう魔法を使うのかご存知でしょうか？」
　観客席の一番前の列にて観戦するため、座っている深雪たち。このあと、女子のバトルボードに出場するほのかは緊張でガチガチになっていたが、その他は本人が秘密にしている蒼司の戦法を予想しあっていた。そこに合流した達也に深雪が、どういう魔法を使おうとしているのか質問した。
「俺は蒼司の担当エンジニアじゃないから担当した五十里先輩に聞いたんだが、蒼司がＣＡＤに入れた魔法は移動魔法と加速魔法と硬化魔法だけらしい」
「は？渡辺先輩でもあるまいし、そんなので勝てるの？」
「それは見ないとわからない。本人は自信満々だったが」

「お兄様、もうすぐスタートです」
全選手が並び終え、スタートの合図が鳴ると一番に飛び出したのは蒼司だった。移動魔法と加速魔法で先頭に躍り出る。が、最初の難関。鋭角カーブに近づいても蒼司は加速を緩めようとはしない
「ち、ちょっと!?蒼司くん。完全にオーバースピードよ!?」
「これじゃ、渡辺先輩の事故と一緒だぞ!」
「……まさか!」
達也が蒼司の狙いに気づいたときには、既にコーナー入り口。悲鳴が所々あがるが、何故か蒼司はオーバースピードのまま曲がりきった。その後も全てのコーナーでオーバースピードであるにも関わらず簡単に曲がり、蒼司は大差を着けて予選を一位通過したのだった
「あ、あの…達也さん。蒼司くんは、どうやって曲がったんですか」
「そ、そうよ!完全にオーバースピードだったのに」
「恐らく硬化魔法を使用したからだろう」
「硬化魔法で?どういうことだよ、達也」
蒼司の組である第二レースが終了すると、わかったような反応をした達也に質問が飛び、達也もあくまで予想ではあるがと自分の予想を説明し始めた
「硬化魔法の定義は対象を硬くするのではなくあくまで相対位置の固定だ。蒼司は恐らくカーブの前で硬化魔法で自分のボートとコースの端の相対位置を固定し、曲がったんだ。そうすれば、コーナー前で減速せずとも理論上は早く曲がることができる」
「相対位置を固定して……ですか?」
「ああ。わかりやすいイメージならレールの上を猛スピードで駆け抜けていくと思えばいい。だがこれも一歩間違えれば即コース外にぶっ飛んでいくものなんだがな」
三校側も同じく、界斗以外はどう曲がったのかわからず界斗と一緒にいた愛梨が蒼司の動きをみて笑っていた界斗に質問し、界斗は達也と同じような説明をし、愛梨やその他の三校生徒はそれを聞いて理解していた

「アハハハ、あいつらしい戦法だ」
「じゃが羽衣。あの速度であれば、硬化魔法より遠心力の方が高くなり、自身がぶっ飛ぶ可能性があると思うんじゃが」
「それはあいつも承知の上。多分だけど硬化魔法が効かなくなったら体勢を前のめりにして、わざとコースの端にボードをあてて同じく無理やり曲がったんだろうと思うよ」
「むちゃくちゃ強引じゃな」
「同じ戦い方はしようと思えば誰でもできるんだよ。原理は簡単だからね。ただ誰も真似出来ないだろうね」
　アイツらしいと、説明後も笑い続ける界斗の姿に呆れる沓子たち。だが普段見慣れない界斗の姿に珍しさを感じた沓子たちは少しの間界斗の顔をじっと見つめていた

第二十話　※

「楽勝～楽勝～。……さて、対抗策出してくるかな、カイのやつ」
「枳殻、あの走りは俺も流石に肝が冷えたぞ」
「……すいません、ただあの走りが思い付く中で唯一相手の妨害なく戦える策でしたので」
「決勝もあの方法でいくのか？」
「はい。ぶっちゃけますと、あの方法以外用意してません」
　バトルボード予選終了後、本部テントで十文字に呼び止められる蒼司。内容はもちろん、バトルボードの走行。一歩間違えれば摩利と同じ、もしくはそれ以上の怪我を負う可能性もあったためだった。だが、十文字も蒼司の性格をよく知っているため、この方法しか用意していないと聞いても呆れ顔でため息をついただけで、特に怒ることもしなかった
「やはりか……お前らしいと諦めよう。それではな」
「はい」
　十文字は特にこれといったことを言い残すことなく蒼司の元から離れていった
「さて……と。んじゃ、逃げるか！」
　背後から迫る真由美にサムズアップした後、ダッシュでテントを離れる。結局、テントに戻ることがあるため、捕まるの確定しているのだが、それはまた先の話

　場所は変わり、アイスピラーズブレイクの会場。今から行われる男子予選の観戦にきていた
「ねぇ、蒼司。懇親会の時にあった羽衣って人。あの人って強いの？」
「強いぞ。単純な魔法勝負だと俺は絶対勝てないし、十師族の跡取りの一条にも引けをとらないと思うぞ」
「そんなにですか!?」
「ああ。しかもこの競技は唯一、使用魔法のランク制限がない競技。

あいつのことだから、一条とぶつかる決勝以外は観客を沸かせる派手な戦い方をすると思うが……」
　男子に気になる選手がいた雫は、懇親会で友人とわかっている蒼司にどんな人物なのかを聞き、気になる他のメンバーも思い思いの質問を蒼司にぶつけていた
「ちょうど、次がカイの出番だし、見ればわかるんじゃないか？」
　界斗の番である次の試合に移るので、見た方が説明するより楽だと促す蒼司。アイス・ピラーズ・ブレイクは男女共に各々の好みや気合いの入る服装で競技に臨む、
　半ばファッションショーのような一面をもつ競技
　界斗の服装は白の軍服（イメージはＦＧＯの坂本龍馬）を着用して登場した。
　そして、対戦相手も登場し開始のランプが鳴り響くと界斗が発動した魔法に観客が沸く。その光景とは、青い炎で作られた竜が相手の氷柱を呑み込むように動くものだった。その竜は全ての氷柱を溶かすと、真っ直ぐ空へと向かいながら消えて行く
「うーん……ここまで派手にやるとは」
「蒼司、彼はもしかして古式魔法も使えるのかい？」
「ミキにはいってなかったっけ？」
「俺も聞いてないぞ」
「レオもか。……すまん」
「いや、それだけかよ！」
　謝罪の軽さに思わずツッコミを入れるレオ。そんなレオをスルーし、説明する蒼司
「あいつは古式魔法と現代魔法。両方とも使用できる魔法師だ。練度で言えば古式魔法の方が上だとは思う。しかも、面倒な固有魔法ももってるからな」
「固有魔法？」
「恐らくだけど、モノリスの時に見れるからそれまではお預けだな」
　蒼司の予想通り、界斗も決勝まで駒を進めたのち、一条に勝利し優勝の座を勝ち取った。十師族の御曹司に勝利したことにより、他校か

ら界斗への注目が強く集まることになった

第二十一話　※

九校戦の中でも一番人気（特に男性に）のミラージ・バット新人戦に出場したほのかたちが勝利したのを見届けたあと、一眠りしていた達也は、会場に戻るうち、雰囲気が違うことに気付き、自校のテントに急いだ

「お兄様！」

「達也さんっ！」

「深雪？それに雫も……モノリス・コードで何があったんだ？」

テントに入ると、達也に気づいた深雪とそれに続いて雫も達也の元へと駆け寄ってきた。雫はエリカたちとモノリス・コードを観戦しているはずであり、その雫がテントにいることで、モノリス・コードで何かがあったことを察した達也は深雪に質問する。雫の表情が浮かないのもそのことに繋がっていると思ったからである

「はい。実は……」

事の顛末はこう。四校選手が試合開始前に一校代表の森崎たちが居るビルに破綻槌の魔法をかけたため森崎たちのいたビルが崩落。逃げれなかった森崎たちは崩落に巻き込まれ重症を負い、モノリスコードの続行が難しい状態に陥ったのだ

「その時のモニターは外観を写していましたので、正確な中の様子は不明なのですが……」

「あれは故意の過剰攻撃、明確なルール違反だよ」

「雫、今の段階では四高の故意によるものという確証は無いからそう言うものじゃないわ」

「そうですよ、北山さん。決めつけはダメ。疑心暗鬼を口にすると、それが一人歩きして、いつの間にかそれが事実になってしまうんですから」

遅れて、深雪と雫の後ろから割り込んできた真由美が雫に正論でたしなめる。その姿に半ば感心していた達也だったが、真由美にそう

思っていたのではとの鋭い洞察に内心同様しながら、三人の怪我の程度を聞いた
「森崎たちの怪我はどの程度なのですか」
「……重症よ。廃ビル内で破城槌を受けた三人とも瓦礫の下敷きで、魔法治療でも全治二週間、三日間はベッドの上で絶対安静よ」
「この後のモノリスはどうするんですか？」
「本来なら棄権なのでしょうけど。今、十文字君が運営と代理を立てて続行できるよう折衝中よ」
「そうですか」
　代理が認められるのか？と思う達也だったが、ふと蒼司がいないことに気付き、深雪に蒼司の居場所を伝えるが、深雪たちも蒼司の姿が無いのを達也に言われてから気づいたためどこにいったかわからないと返される。

　その蒼司は一校本部テントから少し離れた場所に一人で立っていた。
「……さて、別に男子連中にいい思いはしてないが、ここまでやられると不愉快極まりないな。」
「枳殻、ここにいたか」
「十文字先輩？」
　先ほどの事故について、どう調べるか思案していた蒼司に声を掛けたのは運営委員へ代理をたてても良いよう折衝しにいっていた十文字だった
「交渉が終わってな。代理をたてて続行されることが認められた。そこで、枳殻。お前にモノリスに出てもらいたい」
「既に二種目出場している僕がですか？」
　蒼司は自分に出場しろという十文字に疑問を呈する。既に蒼司はクラウドボールとバトルボード、上限の二種目に出場しているため、本来三種目に参加するのは不可能である。が、十文字もそれがわかっ

ているので強引な解釈を蒼司に提示する。その解釈に納得した蒼司は快く引き受け、モノリスに参加することとなる

二十二話

モノリス・コードの事故の後、一高の生徒内では動揺が走っていたが、普段通りの達也の姿に落ち着きを取り戻すものも多く、友人の蒼司を巻き込んだ事故にとても動揺したほのかもその一人であり、落ち着きを取り戻すと、達也が逆に心配する、気持ちの切り替えでスバルと共にミラージ・バットを1―2フィニッシュで勝利をもぎ取った

その戦いが終わると、達也は喜びを分かち合うことなくミーティングルームへ呼び出される。達也が部屋に入ると、そこには真由美をはじめとした第一高校の幹部が勢揃いしている

「今日はご苦労様。期待以上の成果をあげてくれたことに感謝しています」

「選手が頑張ってくれましたので」

真由美が話しかけてくるが、その内容は妙に形式ばったものであった。そして達也も無難に形式的な答えを返す

「もちろん、三井さんたちの頑張りの結果でもあります。けれど、達也くんの貢献が一番大きいのはここにいる全員が認めていることです。担当した三競技で事実上の無敗、現段階で新人戦の二位以上のポイントを獲得できているのは達也くんのお陰だと私は思っています」

「……ありがとうございます」

達也は少し間を置き、頭を下げた。そして、次の言葉を待つ。

……が、真由美が本題に入ろうとせず、達也が目線をあげると、十文字を目で抑える真由美の姿があった。その後、意を決した真由美の口から語られたのは、現在で総合優勝の戦略目標は達成したが、このまま新人戦も優勝をしたいということ、そして第三高校に一条将輝と吉祥寺真紅郎の二人がいるため、このまま棄権すると優勝は不可能。ゆえに達也に変わりに出ろとの話だった

「いくつか、お訊きしてもいいですか？」

「ええ、何かしら？」

「予選の残り二試合は明日に延期ということでいいんですね？」

「ええ、その通りです。事情を鑑みて明日の試合スケジュールを変更

してもらえることになっています」
「怪我でプレー続行不可能の場合でも交代は認められていないはずですが？」
「それも事情につき、特例で認められることになりました」
　達也が聞いた質問の返答は全て予想通りのもの。だがそうだからといって本人がそれを受けるかは別問題である
　それゆえ、達也は遠回しに拒絶の言葉を発する。数回のやり取りで真由美たちも反論することができなくなり、達也は辞退で話を締めようとしたそのとき
「甘えるな、司波」
　十文字の重みのある声が響く。その後の十文字の言葉により、達也はモノリス・コードに出場することを伝え、真由美と摩利の顔は安堵に緩み、また十文字は頷いた
「それで、俺以外のメンバーは誰なのでしょうか」
「お前が決めろ」
「は？」
　達也は言われたことが理解できず、思わずそう声にだしてしまった
「残り二名の内一人はお前に任せる。二人目は既に決まっているからな」
「決まってる…って、十文字くん。いったい誰をだすつもりなのよ」
「枳殻だ」
「何言ってるの十文字君！蒼司くんは怪我で……「呼びました？」ってキャー!?」
　突如昼間の事故がなかったかのように登場する俺に七草会長は叫ぶ。お化けでもみたかのような表情には流石に傷つくわ
「蒼司くん、怪我なんだから安静にしてないと！」
「安静でなくても大丈夫だからここにいるんですよ。渡辺先輩と同じです」
「君の場合は私と違って重度のはずだろう」
「あなたも相当なものでしたよ」
　七草会長と渡辺先輩の小言が続きそうなのでこれ以上スルーして、

半ば強引に話を進める
「で、誰を選ぶんだ、達也？」
「……では、1―Eの吉田幹比古を」
「いいだろう。中条」
「は、はい！」
「吉田幹比古をここに呼んでくれ。応援メンバーとは別口で泊まっているはずだ」
「やっぱり幹比古か。それでは、十文字先輩。俺は部屋に戻ります。達也、終わったら俺の部屋まで迎えにきてくれ。作戦会議は達也の部屋だろう？」
「ああ」
「なら、よろしく」
　達也に迎えに来てもらうよう頼み、部屋へと戻る。
　と、その途中で界斗と出会う
「やぁ。その体、決勝までもつのかい？」
「さぁね。最悪、戦闘中に血反吐をリバースかな」
「うーん、血反吐の場合リバースではないと思うけど……まぁいいか。まぁ、どうせ上がってくるのはわかってるから激励はしない。本番では手負いであろうと容赦しないよ」
「上等だ。手負いの俺にやられるのをゆっくり待っておけ」
　俺たちはお互いに叩き潰すと宣言するとともに殺気をぶつける。そして、言葉を発することなく別れた

第二十三話

「さて、幹比古には悪いが早速作戦会議を始めようか」
　達也の部屋に集まった俺と幹比古、部屋の主の達也と何故かいるレオとエリカの五人で作戦会議が始まった
「まず、前提として……蒼司」
「ん？」
「お前は、その怪我でどれ程までなら動ける？」
「三校と戦うのを考えると、全試合フルでは動けんな。ディフェンスならなんとかってところだろう」
「なら蒼司にはこれを渡しておく。レオで試運転もすんでいる」
　そういいながら渡されたのは剣。といっても刀身は短く間に切れ目も入っている
「硬化魔法で伸ばしてぶったぎ……ぶっ叩くってことか。ルールの穴をつくやらしい武器だな。それでこそ達也だが」
「褒められている気がしないな……。蒼司にはディフェンスを頼むから幹比古には遊撃を頼む」
　達也は幹比古に役割と作戦に必要な要素が実行可能なのかを聞いていた。内容は正直ちんぷんかんぷんで全くわからん
「それと、蒼司。三校の羽衣について聞きたいんだが……」
「ああ。知る限りでよければ話すぞ。向こうもそれは割りきっているだろうしな」
「では、いくつか聞いていく。まず彼の得意魔法はないか？」
「得意な魔法……ねぇ」
　そう聞かれると困る。界斗に関しては、得意といえる魔法が少ないからだ
「敢えて言うならば幻惑系統……だな」
「幻惑？」
「あいつの場合、父親の血筋？もあって魔法に関してはトップクラスだ。ゆえに得意というのがない。平均が周りの得意や容易のレベルと同じだからな」

「それは十師族にも並ぶ程か？」
「ああ。断言しよう」
　十師族と同等と断言した途端、達也を除く三人の顔がみるみる負の方へと変わっていくのがわかった。なのでさらに追い討ちをかけることにした
「さらにあいつには面倒な魔法があってな」
「面倒な魔法？」
「固有魔法『鏡幻換実』こいつの面倒なところは、ダメージを与える際、界斗本体が認識できる状況でなければあいつがダメージを食らわないということだ」
「ダメージを食らわない!?おいおいどういうことだよそりゃ」
　ダメージを与えられないという事実にどうするんだよと驚きながらも聞いてくるレオだが、うるさい。時間帯でも迷惑になるので、静かに反応しろと言った上で続ける
「うーん、これは達也に聞いた方がいいな。達也はシュレーディンガーの猫を知っているか？」
「一応軽くは知っているが、詳しくは知らない。確か量子力学の話だったか？」
「その通りだ。まぁ、わざわざシュレーディンガーの猫を用いなくても説明はできるが……まぁ、分かりやすく超ざっくりの簡単説明をしようか。幹比古、例としてレオがボールを投げる際、速度等がわかっていればどれほど飛ぶかどの向きに飛ぶか予想はつくよな？」
　訳のわからない話の応酬の中、急に呼ばれたので驚く幹比古だが、質問には、わかると答えてくれた。まぁ、当たり前だ。中学で習う内容だからな
「物理学ではこれで説明できるんだが、量子論では説明できないんだ。結果……というか確率は観測しないとわからないし、逆に言えば観測した結果イコールその確率とも言える。そんな風なことを行うのが界斗の固有魔法だ」
　まぁ、この説明で理解しろとは言わないが、レオたちは全くわかっていないようだ

「簡単に言えば、直接、攻撃が触れていることを確認できない場合、あいつはダメージを受けていない結果に無理やり持ち込めるってことだ。しかも、一対一での状況でもかなり強いが、今回みたいに観客、不特定多数の第三者が居ると尚更面倒だ」
「結果を見るから、自分が音等で当たったと判断できても観客は無事な姿で出てくれれば当たってないと思うからか？」
「全くもってその通り。矛盾点がどこかにあるかも知れんがざっくりの適当説明だから勘弁してくれな」
十師族の御曹司だけでなく、他の強敵の出現に出場する幹比古の顔は暗くなる一方だ
「だからあいつとは俺がやる。傷が深いからどこまでやれるかはわからんがな」
そのあと、明日のこともあり、達也が幹比古のもつ古式魔法の調整を行い、明日の戦いに備えて解散した

第二十四話

蒼司たちは達也の作戦により、順調よく勝ち進み、決勝へと駒を進める。そして予想通り、十師族の御曹司抱える三高が一条一人の独壇場で勝負を決し、決勝へ駒を進める

「さて……と、草原ステージねぇ」

「大丈夫？蒼司」

「ったく……心配そうな顔して……安心しろって、雫。なんとかして勝ってくるからさ」

「……うん、待ってる。頑張って」

決勝の舞台は、遮蔽物のない草原ステージ。圧倒的に三高有利のステージだ。一高テント内、また応援席では既に諦めムードが漂っていた。選手と一部以外…とだけ付け加えなければならないが

「やった！草原ステージだ！」

「三高の優勝は確定だ！強運だな、一条」

「……」

対する三校の本部テントでは、自分たち有利のステージが発表され、喜びながら一条や吉祥寺を取り囲みガヤガヤと騒がしくなっていた。そんな中、界斗だけはその騒ぎを外から冷めた目で見つめていた

「嬉しそうでは無さそうじゃな、羽衣」

「どうしてかしら？こちらの勝利は確実だというのに」

「浮かれて足元掬われたら笑えないでしょう？まぁ、全力のアイツと戦えないのも、嬉しくはないですし。……そろそろ時間か。いってきます」

「武運を祈っておるぞ！界斗」

「……どうしたんだ、羽衣。顔赤いぞ」

「……なんでもない」

「アダッ！なんで俺は蹴られるんだよ！」

沓子から激励を受け、片手を挙げることで返したが、のちのち名前

で呼ばれたことに気付き、それを一条に指摘されるが、照れ隠しの意味も含め（半ば本気で）タイキックをかました界斗だった

「ねぇ、変じゃないかな。この格好」
「そうか？」
「逆にそこまで堂々と立てる蒼司が凄いよ」
フィールドに現れる一高の蒼司たちと三高の界斗たち。会場は、現れた選手のうち、蒼司のマントと幹比古のローブ姿を見て何だあれはとざわついていた。
ローブを着た幹比古も自分の格好が恥ずかしくフードで頭を隠すが、マントを着ているが普段と変わらない雰囲気の蒼司を凄いと素直に称賛していた
「あれは、ジョージの不可視（インビジブル・ブリット）の弾丸対策か？まぁいい、地の利は俺たちにある」
「新人戦優勝は持っていかれたけど、モノリス・コードだけでも勝ちたいね」
三高側でも蒼司と幹比古の服装に反応するが、問題ないと思考から除外する。そして、このモノリス・コードだけでも自分達が勝利すると意気込む。
『試合開始！』
合図が響くと同時に達也と一条の二人は互いに真っ直ぐ距離を詰めながら魔法の打ち合いを始める。達也は一条の魔法を術式解体（グラム・デモリッション）で撃ち落としながら攻撃する。が達也の攻撃は一条の防壁に阻まれ、届かない。一条もまた、達也が魔法を発動前に破壊するので、攻撃は通っていない。そんな攻防を魔法を可視化したモニターで見ている観客は二人が織り成す幻想的な空間に感嘆の声をあげていた
「最初から達也の攻撃が通らないのは百も承知。しかし……この様子だと界斗のやつは作戦に一言も口を出していないな、珍しい」
「どうしてそう思うんだい？」

「あいつが考えそうな戦法じゃないからってのと、俺が動くことを考えてない動きだからだな。っと、吉祥寺が動いたか。……作戦通り、支援はするから幹比古は吉祥寺の相手を頼むぞ」
「うん、頑張るよ」
　そして、ある程度達也と一条の距離が縮まったところで吉祥寺が動く。それを確認した蒼司は幹比古を事前の作戦会議で決めた通り、幹比古を対応に向かわせる
「さてと……界斗。お前はどう動く？……そろそろ体も限界だ。早めに決着がつけばいいが……というか、決着つかなかった場合の後が怖ぇな」
　蒼司は幹比古が吉祥寺の元へ向かった後、界斗の姿を見ながらモノリスに体を預ける。暫くは界斗の動きに注視するが、幹比古と吉祥寺が接触しかけると、支援するためそちらの方へと視線を向ける。もちろん、界斗への警戒は怠らずに

「吉田幹比古か……なっ！」
「驚いた顔してるけど、バカなのか？あの吉祥寺は。ローブだけでも対策されていると分かるのに得意魔法使うとは……」
　吉祥寺は不可視の弾丸で幹比古を倒そうとするが、幹比古の幻術で照準を定めることが出来ず驚き、焦り、思考が停止する。その隙を突こうと幹比古が魔法を放とうとする。が、その幹比古の体が突如飛ぶように横へと移動する。その直後、一発の空気弾が幹比古がいた場所を直撃する
「表情だけで言いたいことがわかるとか……ポーカーフェイスを知らんのか、一条は。大方、幹比古を倒せなかったが吉祥寺なら大丈夫だ……かな。全く、他人の心配ができるような場所でないのに」
　放たれた一撃は、吉祥寺の窮地を見た一条によるもの。幹比古が移動したのは、一条の行動を見た蒼司によるものだ。そんな一部始終の中、突如界斗から怒号が飛ぶ
「一条！いつまで吉祥寺の方を気にしてる！前を見ろ！」
　一条は、助けた吉祥寺の方に意識が向いており、達也のことは頭か

ら消えていた様だ。慌てて達也の姿を探すが達也は既に隙を突き一条との距離を詰めていた。その事に気づいた一条は反射的に魔法を放つが焦りからかレギュレーション違反の威力で１６発放ってしまう

「あの野郎……だがここからじゃ射程外……いこうにも…『ドゴッ』いかせてくれねぇよな、やっぱり。だが界斗のやつもなんで止めない？」

「……」

「目的は達也か？」

　蒼司は一条の魔法を少しでも撃ち落とそうと動こうとするが先読みした界斗に妨げられ、動けない。だが自チームの反則を処理しようと動かない界斗に疑問を持つが、視線の動きから達也を意識した動きになっているのに気づく。そんなやり取りの内、達也は次々と魔法式を撃ち落としていく。が、最終的に間に合わなかった二つの魔法を受けてしまう。……が、地面に倒れこむことなく着地し、その光景を呆然と見ていた一条の耳元に手を差し出し、指を鳴らす。その音を増幅した威力で鼓膜を破り、一条を相討ちにて倒す

「直撃でノーダメージ？いや、ありえんだろ……」

「将輝が……負けた？そんな……」

「っ！吉祥寺っ」

「悪いな」

「しまっ……ガッ」

　さっきの界斗の言葉に反応していた吉祥寺は自分が絶対的信頼を寄せる一条が達也に倒される光景を目にして、ショックを受け呆然とする。そんな隙を蒼司が見逃す筈なく、縮地を使い接近と同時に剣を叩きつけ吉祥寺を倒した。界斗も気づくが、間に合わないと判断して、モノリスから離れることはしなかった

「界斗はモノリスから離れてないのね……その方が助かる。……さて……回避できないと思ってぶっ飛ばしたが、大丈夫か？幹比古」

「なんとかね。……相手はあと？」

「界斗だけだ。こちらは達也が無事だったらよかったが一条と相討ち

で戦闘不能だ」
「これからどうするんだい？」
「俺が界斗とサシで勝負する。その内に幹比古がモノリスのコード入力をしてくれ。俺と戦う時点で界斗は幹比古の妨害をするのは難しいはずだ」
　一条からの攻撃を回避させるため、吹き飛ばした幹比古と合流した、蒼司は幹比古に現状とこれからのことを伝え、一つのＣＡＤを手渡す
「幹比古、これ持っとけ。わかりやすく言えば、十文字先輩のファランクス擬きだ。それを持って、超大回りだったら、巻き添えを食らわずにいけるはずだ。……多分」
「多分ってなに!?」
「それだけドデカい魔法の撃ち合いになるってだけだ……いくぜ、界斗ぉ！」
　幹比古に伝えるだけ伝えた後、剣を構えて真っ直ぐ界斗へと走り出す蒼司。一条と同じく圧縮した空気弾を放つ界斗だが、その数３２。先程一条が放った数の倍である。威力は規定内とはいえ、この数が当たれば只ではすまない。会場も先程のことがあったからか騒ぎたてるが、蒼司は何のそのと全弾切り落とし、さらに別に持っていたＣＡＤでお返しに同じ数の空気弾を放つ。
「母親があの人なのはわかるけど、一朝一夕で使ってくるとかズルくねぇかな!?」
　放たれた空気弾を同じく切り落とす界斗。その手にあるのは達也が作成したＣＡＤと同じ原理のものだ。そこから始まったのは互いに防御を棄てた剣と魔法の死合舞台
「さーて、限界まで後どれくらいかな？あと五発？」
「ほざけお前が倒れん限り体は持つ」
「それ持つんじゃなくて持たせる……じゃない？」
　斬り結びながら、その場所へ互いに魔法を放つため、既に二人とも自分のか相手のかわからない空気弾をその身に受けながら戦う。そんな光景をみた観客席は、その凄惨さに飲まれごく一部を除き、言葉

を発することなくその光景を見つめていた

「なんて戦いだよ、これ……」

「それに、蒼司くんの体が心配です……達也さんとは違って数が多すぎます……」

「そうですよ……でももしかしたら蒼司くんなら大丈夫……」

「うん。私もそう思って……うそっ！蒼司!?」

「しっ雫!?ちょっと、落ち着いて……」

戦いを見届けていた雫が突如叫ぶ。その理由は、戦いの最中、蒼司が大きく血を吐いたからだ。だが、それでも互いは止まらない。止まることなく、逆に戦いの激しさは増していった。止めないといけないのではとの声も上がるが、大会委員が動く気配はない

「蒼司君!?……ちょっと十文字君！これはどういうこと!?」

「……すまない、七草。実のところ、枳殻は絶対安静の体で戦っている」

一高の本部テントでは突如血を吐く蒼司を見た真由美が十文字を問い詰める。こうなっては仕方ないと、十文字は隠していた蒼司の怪我の内容をテント内の全員に話す。それを聞いた真由美が十文字を責めるが、それは摩利に止められる。そのとき、巻き込まれないよう遠回りをしながら戦いを見て、急いだ幹比古がモノリスにたどり着き、モノリスに鍵を打ち、コードを打ち込み、勝利条件を達成する。ここで、モノリス・コードは一高の勝利で終わった

「チッ……ゴフッ…もう…終わりか…カフッ」

「その体でまだ戦いたいとか、お前はあの副長か？狂化に痛覚麻痺でも付与されてんじゃねぇのか？」

「付与されてたらこんな状態になってねぇよ。もっと酷くなってらぁ……」

「おいおい、倒れないでくれよ」

「蒼司！」

戦いが終わるときのブザーを聞いた蒼司は、体を界斗へと預け、耐えることなく血を吐き出す。その蒼司へ界斗は軽口を叩くが、その界

斗自身も出さないだけでフラフラである。
蒼司は、コードを打ち終え、界斗のもとまでやって来た幹比古の肩を借り、ゆっくりと戻っていく。その間も、血を吐き、途中、担架が来るが、乗らず拒否し、そのまま歩いて戻ろうとする
「蒼司、無理しないで担架を使わないと」
「悪いが、あっちまでいったらすぐにいかないといけない場所があるんでな。それまでは乗ってられるか」
「でも！」
「幹比古、言って聞かないんだ。許してやってくれ」
「達也まで……」
「感謝の印に美月とのデートをセッティングしてやるから……」
「なっ、何をいってるんだよ！」
蒼司は軽口を叩きながらも、行かないといけない場所……雫のことを見つめていた。
そして、観客席まで戻ってくれば、魔法も使って観客席へと跳んで移動し、雫のもとへ向かう。
既に雫は涙を流しており、後が思いやられると苦笑いしながら歩み寄る蒼司は、周りの注目を一身に受けながら膝をつき、一言告げる
「蒼司……」
「心配かけて、ごめんな。それと、あ～ただいま？」
「なんで疑問系なの……バカ蒼司。心配だから早く医務室にいって。後で行くから」
「おう、りょーかい……あ、そうだ。雫」
「……なに？」
「好きだよ。……今じゃないと、素直に言えそうにないからね…。それじゃ」
雫から医務室にいってとのお願いを素直に聞き、魔法を使って観客席から飛び降り、地面へと着地。そのあと、選手用通路に待機していた担架に乗り、医務室へと運ばれる。飛び降りる前に最大級の爆弾を置いて……

「不味いわね……一条くんが負けたなんて」
「そうね……しかも、羽衣くんと一高の枳殻くんの実力……」
「魔法界の権威を大事にする人たちにとってはこの結果は受け入れがたいわね。十師族の力の宣伝場で十師族の人間ではなく、全く関係ない選手が大活躍したんですもの……」
「あやつ……儂に心配かけおって」
「沓子？」
　観客席で見ていた愛梨と栞はこの試合における界斗への影響を心配していた。周りの三高の生徒たちは、帰って来た一条へ拍手を送る。そんな中、一人雰囲気が違う沓子に愛梨が声をかける。すると、少し怒気を含めた声で沓子が二人にこれからのことを話す
「儂は今から界斗のところに向かうが二人はどうするんじゃ？」
「……私もいくわ。羽衣君の様子が気になるから」
「二人がいくのなら、私もいくわ」
　三人は界斗たちが選手用通路に入ったのを確認後、選手の控え室まで移動する。許可を取り、控え室の中に入るが、目的の界斗の姿はなく、一条曰く外へ出たと言うので一条たちへ、励ましの言葉を掛けたあと、界斗の姿を追い、外へ出る。界斗の姿は案外すぐに見つかった。それほど人目につかない場所の木に背中を預け、一人座っていた
「羽衣くん」
「一色さんに十七夜さん、それに四十九院さ……」
「この……バカ界斗！」
「は、はい!?」
　唐突に沓子に怒鳴られ、姿勢を正す界斗。そして、沓子から今回の戦い方を怒られる。が、終いには沓子が泣き出した為、謝罪しながら抱き締める。
「ごめん、つくし……」
「沓子で構わん。……もうお主のあんな姿を見るのはこりごりじゃ」

「心配してくれて、ありがとう。……と、沓子」
「好きな相手の名前ぐらいで言い淀むんじゃないわ、バカもの」
「な～んでバレてるのかな？」
「お主の態度を見ていれば誰でもわかるわ」
「なら……沓子、貴女が好きです。お付き合いしてくれますか？」
「うむ！」
界斗の告白に応えた沓子の顔は満面の笑みだった

第二十五話

「んっ……寝てたか」
「ようやく起きましたか。長過ぎです」
「んぁ？界斗……なんでここにいるんだ。てか何時だ？腹減ったんだが」
「実家感覚で話を進めないで貰えます？」
　医務室に運ばれた蒼司は体のダメージと疲れにより眠りにつき、目が覚めたときには、隣に界斗が座って携帯を触っているところだった。ただ、界斗の方も蒼司の口から出たのが、家での会話風だったので呆れたとばかりにため息をつく
「全く……一日以上寝てた口から出るのがそれですか」
「そんくらいはやっぱいるか～」
「一日以上寝たきりと聞いた返事がそれですか。僕がどれだけ苦労したか……」
　そう言いつつ、界斗は蒼司が医務室に運ばれてからの事を思い返す。
　蒼司が医務室に運ばれた後、医務室へと一高生徒が数多く駆けつけた。あずさのようにホッとするもの、真由美のように後で怒らないとと決意するもの、十文字の様に声を掛けるものと、各々様々なことを胸に秘めながら次の試合のために医務室をあとにしていた。その場には界斗もいたのだが、割愛させて頂く。
「とりあえず、今日行われたミラージ・バットの本戦の結果を伝えておきましょうか。優勝は一高、同時に総合優勝も今日の時点で決まりました」
「そうか……司波さんは優勝したのか」
「その際、予選の途中から飛行魔法を使用。そのあと、飛行魔法の術式が全ての高校に配られましたが、ぶっつけ本番で使っても練度の差で、他の高校は一人一人脱落。最後まで、愛梨さんも健闘はしましたが及ばず……という形で終了です。また、一高の選手の一人が事故により、欠場となりました。……回復しても魔法師としてやっていける

かは怪しいですが」
「ふ～ん」
　界斗から聞くミラージ・バットの結果と、あった事故の話に、軽い返事をした蒼司は界斗へモノリス・コードの試合中の行動について尋ねた
「なぁ、界斗。なんであの時達也を助けようとしなかったんだ？」
「……僕の両親と、終夜さんからの依頼ですよ」
「わざわざ魔法を使って傍聴対策……なんなんだ？」
「父さん曰く、彼…司波達也には何かある。それで、見たいから干渉を出来るだけ避けろと。見てから何をするかは知りませんけど」
「どうせ父さんたちのことだ。見て楽しめるなら干渉して、そのあとｇｏｏｄ―ｂｙｅ……てやつだよ」
「ですよねー」
　遮音シールドを張ってから会話を始める界斗に蒼司も気持ちを切り換えるが内容が父親のいつも通りの行動のため、遠い目をして、界斗もそれに同意する。が、両方とも、父親の何かある…と自ら動くときは大抵が、事の大きい話のため、そういう可能性があることを心に留めておくことを忘れていなかった。

　場所は移り、横浜ベイヒルズタワー。ここで先ほどまで達也が九校戦の裏で賭けを行っていた無頭竜（ノーヘッド・ドラゴン）のトップの情報の入手、及び幹部の暗殺を行っていた
「終わったわね……」
「ええ」
『いやー、面白いものを見せて貰ったよ』
「誰だ！」
　情報を回収し終わったところに、どこからか声が二人の耳に届く。達也は即座に警戒し、さらに精霊の眼を発動する。すると、自分たち

の一段上に人影が三つ見えたため、自身のＣＡＤをその方向に構える。すると、スーツを着た二人の男とピンクを基調としたメルヘンなドレスをきた女性が目の前に現れる
「そうだな……敵でも味方でもない…傍観者ってところかな。ということで自己紹介を。俺の名は枳殻終夜。お察しの通り、蒼司の父親だ。そしてこちらが」
「羽衣錬と申します。君の対戦相手の羽衣界斗の父親です。そしてこちらが羽衣束。界斗の母親であり、我らＲ＆Ｄの技術者Ｍｓ．ラビット」
「は～い、束さんだよ～。ブイブイ」
「ということだ。で、そのＣＡＤを収めてくれないかな？四葉達也くん」
「なっ……」
　達也は関係のあるものしか知らない筈の情報が終夜の口から語られたことに驚愕する。どうやって知った？どこから漏れた？と思考しながらも三人への警戒は怠らない
「あら？」
「そりゃ、四葉の関係者であるとの情報が知られているという時点で警戒を解く訳が無いでしょうが。ねぇ、トーラス・シルバー？」
「それも知られているのか。それで、何が目的で、傍観者とはなんだ？」
　達也は既に四葉との関係を知っている時点で覚悟はしていたからかさほど驚かず、強気に返す
「まぁ、警告やらなんやら色々あるが……まず一つ。あちらにも警告はしているが、九重八雲を使って周辺を嗅ぎ回るのは辞めてもらおうか。それと君の情報を蒼司たちが俺たちから得ることはない。信じてはくれないだろうがこれは、事実と受け止めてもらう他ないな」
　九重八雲による諜報がバレていることに内心驚く達也。自分の師であり、忍としての実力も高い九重八雲が見つかるのはそう簡単ではない。そんな達也の驚きを知ってか知らずか終夜はさらに続ける
「そして疑問にあった傍観者だが……この人生（物語）は蒼司のものであっ

て俺たちのではない。だからこそ、深く関わるというのは、親としても野暮というもの。ゆえに外から見守るだけのこと」
「それにしては深く干渉していると思うんだが？」
「仮想敵として見られているのが嫌だっただけのことだ。では、失礼しよう。今後とも息子と仲良くしてくれると嬉しいよ」
「待て！……消えた？」
突如、達也の前から消える三人。その姿は達也の精霊の眼で見た世界でも痕跡一つ見えず、文字通り消えた。
達也は友人の父親だとはいえ、危険人物として四葉当主の叔母に報告することを決める。場合によっては排除するとの覚悟を決めて……

二十六話

「さてと……雫たちはどこかなー」
「心配かけた相手への申し訳なさ一切ナシですか、そうですか。はぁ」
　九校戦が始まる前の懇親会と同じホールで既に始まっていた後夜祭。少々のスタッフの出入りもあり、ドアの開閉に誰も気にすることはなかったが、蒼司と界斗の二人がホールに入ると、二人の姿を見た生徒から順に注目が二人に集まる。だが、二人ともその注目は何のその、目的の人物の姿を探して周囲を見渡していた
「あっ！え、えっと……蒼司、その…もう動いて大丈夫なの？」
「ああ、モノリスみたいな無茶も無いから安心してくれ」
　目的の人物……雫の姿は案外早く見つかり、蒼司が話しかける前に雫の方から心配する声をかけてくる。が……普段と違い、少し気恥ずかしさを感じさせるしどろもどろな声だった。原因は言わずもなが、蒼司の告白である
「なぁ、雫。後でいいんだが……」
「ひゃっ！」
「あの告白の返事、聞かせて「ふんっ！」アダッ！いきなり何する、界斗！」
「では、一言。調子に乗るな！」
　雫の雰囲気の違いとその原因が自分だというのがすぐわかった蒼司は少々のいたずら心で、雫を抱き寄せ耳元で囁くが、界斗からの一撃で中断され、文句を言うが即返される。さらに文句を続けようとするが、ヒヤリと寒気を感じ、悪寒を感じた方を向くと、綺麗な笑顔の深雪が立っていた
「あ、あの……深雪さん？夏なので、涼しいのはありがたいのですが、これは涼しいというより寒いと……」
「さんざん雫に心配をかけた人が言うことでしょうか？」
「はい、私が悪いです。申し訳ありませんでした！」
　深雪に責められ、即謝罪する蒼司。腐れ縁の界斗はともかく深雪たちには反論の一つも出来ない状況である蒼司は自分が生んだ物では

あるが、早く終わって欲しいと内心思っていたが、周りが許すはずもなく、段々と敵が集まってくる
「そ・う・じ・く・ん!?」
「や、やぁ真由美さん。この度はご機嫌麗しゅう…」
「そんな言葉で逃げれる訳が無いでしょうが！確かに私たちは総合優勝をしたいと言ってたし、モノリス・コードでも勝ちたいと思ってました！けどそれだけのために君があんなケガでも出場して欲しいと私が思うわけ無いでしょうが！」
　完全に怒りのオーラを発しながら近づいてきた真由美に当たり障りのない挨拶をしながら一歩後退するが、逃げれる筈もなく、服を掴まれ非の打ちようがない正論にて怒られる
「あんな戦いでさらに傷ついて、皆に……特に北山さんにどれだけ心配かけたかわかってるんですか!?しかもそんな中、最後も身勝手に……」
「あなたが告白を言い淀みますか？悪いと思ってるので謝罪も含めて後で話がしたいと言おうとしたらこいつに止められまして……」
「そりゃ止めますよ！やり方を考えなさい！全く」
「お前はオカンか」
「誰がオカンだ！しかもどこかで見たような掛け合いですね！」
　全く、どこの赤い弓兵なんだろうか……
　とそんなことはさておき、蒼司と界斗の二人の登場で少し固まっていた会場も次第に、ダンスが再開されていっていた
「ダンスか……雫、一緒に踊ってくれますか？」
「うん！」
　蒼司は踊っている他校の生徒の姿を視界に入れると、少し考え、雫に手を差し出し踊りに誘う。雫は二つ返事でＯＫを出し、踊りの輪に加わった。その後、密かに蒼司は雫を外へ連れ出した
「全く……蒼司のやつは」
「なんじゃ、お主は誘ってくれんのか？」
「まさか。それでは、私の詫びも含めて、一緒に踊ってくれますか？沓子」

「うむ！」
「後で、私と栞とも踊って貰うわよ？」
「喜んでお付き合いさせていただきます」
　界斗も沓子を踊りに誘い、沓子、愛理、栞の順で三人と踊った後、最後に真由美と踊ることになり、踊り終われば、残り時間を沓子たち三人と談笑していた

「いきなり連れ出して悪いな、雫」
「ううん。それよりも、話って言うのは……」
「さっきの続き」
　蒼司はダンスの最中、雫を連れ出し外の庭園まで移動していた。理由は勿論、中断した告白騒ぎの続きである
「モノリス・コードに関しては悪い事をしたと反省してる」
「ホントに？」
「信用ないな～アハハハ。けど、そんな俺でいいのなら、北山雫さん。どうか俺と付き合って貰えますか？」
「はい。喜んで」
　結ばれた二人の影は次第に近づき、やがて一つに繋がった

二十七話

「それでは、蒼司君。お手柔らかに頼むよ」
「千葉の麒麟児と戦えるのは素直に喜ばしいですが、何故私と戦おうとお思いで？」
「そんなに固くならなくても大丈夫だよ。九校戦での三校の子との対決を見てね。一度戦ってみたいと思っていたんだ」
　蒼司は今、エリカの実家の道場で近接戦で世界十指の実力者であるエリカの兄、千葉修次と向き合っていた。
　周りには達也たちいつものメンバーが観客として二人の様子を見守っていた
「蒼司くんとエリカさんのお兄さん。どちらが勝つのでしょうか」
「千葉修次と言えば、近接戦では世界十指の中に入る実力者だ。蒼司が楽に勝つような相手ではないのは確かだ」
「でもよー。蒼司もなんか余裕そうだぜ？」
「そろそろ始めるから皆黙っててね」
　外野の達也たちも、美月筆頭にどちらが勝つのかの予想をしあっていたが、審判を務めるエリカによって終わりを迎える。
「それでは、構えて」
「その構え……天然理心流か。誰に教わったんだい？」
「秘密ですよ。（沖田さんや副長に教えて貰ったとか言えるわけないしなぁ）」
「では、始め！」
　エリカの合図と同時に撃ち込む二人。道場に木刀がぶつかり合う音が響くなか、修次は蒼司の攻撃を捌きながらとある事に気づく。
「（所々に天然理心流とは違う剣術の太刀筋がある。しかも一つだけじゃなく複数も。一体、いくつの剣術を会得しているんだろうか）」
「そう易々とは攻めきれ無いか。さて、使いたくないけどアレを使うか？けど未だ至らぬ天元の剣と同じくかの域までは未到達……はてさて、通るか否や」
　蒼司は天然理心流の他に、いくつか他の流派を混ぜて攻撃してい

る。が、修次の防御を突破出来ず攻めあぐねている。そのことを蒼司は気にしない。ただ、修次の防御を突破するため、先程まで使わなかった剣術を使う。
その名を『巌流』あの佐々木小次郎の剣である
「(急に動きが変わった) 次は一体何を見せてくれるのかな?」
「……秘剣『燕返し』」
修次に襲いかかる秘剣は本来、三方向の斬撃が同時に存在するもの。だが蒼司のはほぼ同時の連撃であり、本来のものよりは対処はしやすく、修次にも防がれるが修次自身、全てを防げた訳でなく最後の一撃を食らう事となった
「降参だよ。君は一体、いくつの剣術を使えるのか教えて欲しい所だよ」
「……二天一流、天然理心流、巌流、北辰一刀流、柳生新陰流、小野派一刀流。その他色々と」
「予想を越える数に驚きを隠せないけど、それはともかく教えてくれるんだね」
「別に隠す必要がありませんので。しかし何故降参を?まだ戦えるのに」
自身の扱える剣術を問われた蒼司は包み隠さず修次へ伝える。そして、蒼司も何故ここで終わらせたのか聞くが修次にはこのあと別の予定があるらしく、キリがいいので降参をしたとのこと。名残惜しく握手をしたあと達也たちに挨拶をして修次は足早に道場を出ていった。蒼司も達也たちの元に向かおうと振り向けば、木刀を構え、獲物を見つけた眼をするエリカが立ち塞がった
「私が何をしたいのか言わなくてもわかるよね?」
「自分とも戦え。だろ?達也、悪いけど開始の合図を頼む」
「わかった。両者構えて」
「手を抜いたら怒るわよ」
「わかってるよ。わざわざ手を抜くような事はしないさ」
「始め!」
エリカと戦うことになる蒼司。互いに拮抗した勝負を繰り広げる

が、次第に蒼司が優位にたち、最後はエリカの木刀を払い飛ばした蒼司が勝利を掴み取った

「あ～も～蒼司くん強すぎ。私、少し自信無くしそう」
「エリカだって十分強いじゃないか」
「蒼司くん！ムカついたからケーキ奢りなさい！」
「なんでそういう流れになるんだよ！別にいいけど。あ、やっぱり一つ条件が」
「何よ」
「レオにはホールの激辛ケーキを食べきるまで帰れませんってことで」
「何でだよ！」
「いいわね。のった！」
「お前も乗るな！」
八つ当たりにケーキを所望したエリカへ蒼司の悪提案があり、乗ったエリカと二人で激辛ケーキをキッチリ食べさせられたレオなのであった。ホールは蒼司が本気でやろうとしたため達也たちが全力で止めました

二十八話

夏休みのとある日。界斗は一人、学校近くの公園で自分が呼んだ愛梨たち三人の到着を待っていた
「うーん、例の時間まではまだまだあるか」
「お、おったおった。界斗、こっちじゃ！」
「僕の方が先に来てたんだけどな。まぁ、いいか」
界斗の姿を見つけた沓子の呼び掛けに応えた界斗は、入り口に集まっている三人の元へ向かう。公園の入り口にいた三人の姿に一瞬だが目惚れる界斗。愛梨の服装は、白を基調としたワンピース、栞の服装は大胆にも肩出しのトップスを来ており、普段とのギャップが大きい。沓子はミニスカート等少し動きやすくも可愛い服装だ
「おはよう、みんな」
「おはよう、界斗くん。早速聞きたいんだけど、いきなり呼び出して何かしら？」
「うーん、いきなりではないと思うんだけどなー。三日前には連絡したし、皆も服装バッチリで可愛いし」
「ほほう、つまり先程の間抜けな顔はわしらに見惚れたからか」
「沓子、そういうことは言わないの。界斗くんの珍しい顔なんだから。それで愛梨の言う通り、呼び出したのは何でなのかしら？」
若干トゲのある言い方も界斗への信頼があってこそであり、それをわかっている界斗もなんとも言えない顔をしながら自分の財布から四枚のチケットを取り出した
「これ、今噂になってんのかな？まぁ、そのケーキバイキングのチケットなんですが、貰ったけどいく相手がいないんでみんなとどうかなって……」
「おお！それはいいのう」
「でもそれって入手が難しい筈だけど、どうやって入手したの？」
界斗の出したチケットは現在、女性大人気のケーキ店によるケーキバイキングの参加券であり、ホテルのホールを貸しきって行われるが

抽選のため、超高倍率となってしまい、入手は時の運と化しているもの。ただし、界斗には別の入手ルートがあった
「会場が父さんの知り合いのホテルでね。家族でって貰ったんだけど僕以外、行くことが無理だからって。それで皆と行こうかなと。まだバイキングには時間があるけどどうする？ショッピングであれば、荷物持ちぐらいするけど？」
「なら遠慮なく荷物持ちをしてもらいましょうか」
「愛梨さん、加減はしてよ？」
　話が纏まると、会場近くのショッピングモールでショッピングを楽しむ愛梨たち三人。界斗は宣言通り、荷物持ちをしながら、新しい服について意見を求められれば答える程度のことをこなして、時間を潰していた

「ん～美味しい。これは界斗に感謝じゃな」
「そうね。けれど、本当は沓子と二人で来たかったんじゃないの？界斗」
「痛いところ突いてくるなー、栞は。確かにそうだけど、三人のいい笑顔が見れるならいいかなって」
「あら、その言い方。沓子の前で他の女性に目移りしてると自白してるようなものよ？」
　ケーキバイキングの会場に着いた四人はそれぞれ好みのケーキをいくつか取り、同じ席で楽しく会話をしながらケーキを食べる。話題は先程までのショッピングや、記憶に新しい九校戦の反省点だ
「界斗、少し良いかしら。モノリスコードの時、もし一校の枳殻くんが事故の負傷が無く、万全の状態だったらモノリスの結果はどうなってたのかしら？」
「ソウが万全の状態だったら……か。正直、実際に戦わないと僕の戦法が通じたかわからないけど予想でなら半々の確率かな」
「どうしてそう思うのか理由を聞いてもいいかしら？」
「いくつか理由はあるけど、ソウを倒すのに僕だけでは不可能ということ。これが最大の理由だね」

「どういうことじゃ？」
　界斗の話す結果とその理由に疑問を持つ三人。疑問を持たれることは承知の上のため、あとで解説することを説明して先に理由を言い切ることにした
「第二に、草原ステージであること。あのメンツだと一番メリットがあるのはソウだからね。そして第三に、ルールの穴を突いた近接武器をソウが持っていること。逆にこっちの優位な点をあげるとしたら、あの事故が無い場合は、ソウのチームメイトが高い戦闘技術を持っていないこと。あと、メカニックとして彼、司波達也が絡んでいないこと、かな。詳しい話はみんな追加のケーキを取って来てからだね」
　既に四人の皿にケーキは無く、一旦全員がもう一度ケーキを取り直して、中断した話を戻す
「とりあえず、最初の理由からいこうか。僕とソウの力関係を簡単に表せば、近接戦闘では確実にソウが上。逆に魔法に関しては僕が上。だけど困ったことに総合で見れば僕よりソウの方が上なんだよね」
「だから近接戦闘が出来るあのＣＡＤを持たれていたことがデメリットにあったのね。なら草原ステージであったのは？」
「あのとき、怪我の影響でソウは使わなかったけれど、アイツ、縮地っていう高速の移動方が使えるんだよね。まぁ、僕も同レベルで使えるんだけど」
「その縮地があるから障害物のない草原ステージも不利の一つとなるわけか。む？じゃがお主も使えるのなら別に不利ではないと思うんじゃが？」
　沓子の疑問は当然のもの。レベルが違うならまだしも同レベルの使い手が戦うのであれば、それは別に不利な点では無いはずだから。だが、界斗はハッキリと不利だと断言する
「必ず僕が後出しになるからさ。ソウは必ず最初に突貫してくる。いっちゃ悪いけどソウにチームメイトを守る気は無いから。だから一条や吉祥寺に味方が倒されようが、関係ない。なぜならその時には既に自分の得意領域たる間合いまで踏み込んでいるから」
「お主が先に突っ込むのはどうなのじゃ？」

「その場合、一条たちの射線に入るように戦われるから二人が機能しなくなるね」
「ふむ、そうか……」
「で、答えてる僕が言うのもなんだけど、せっかくのケーキバイキングなんだし、明るい話題で楽しまない？」
「界斗、お主さっきまでの雰囲気ぶち壊しにきおったな」
　彼氏の流石の行動に沓子も困った顔で突っ込むが、実際のところ界斗の言う通りなため、話題を切り替えて一時の団らんを過ごした。
が、ケーキバイキング終了後、再度荷物持ちとしてコキ使われることになった界斗だった
「いや、なんでさ！」